

## ガーリブのウルドゥー語書簡に見られる 19世紀半ばのデリーについて

山 根 聡

### は じ め に

ガーリブ Mirzā Asad Allāh Khān Ghālib (1797-1869)<sup>1)</sup> は、ムガル朝最期の皇帝バハードゥル・シャー・ザファル二世 (Abū Sirāj al-Dīn Bahādur Shāh Ṣafar Thānī (1775-1862, 在位 1837-1858)) の詩作の師匠 (ustād) を務めた経歴<sup>2)</sup>を持つ、ペルシア語とウルドゥー語の詩人として知られるが、同時に、その簡明なウルドゥー語による書簡は

- 1) アクバラーバード (現アグラ) 生まれ。トルコ系の軍人の一族に生まれた。父親はガーリブが5歳の時に戦死、弟と共に叔父の許に引き取られる。叔父は軍人としてマラータに仕えた後、イギリス軍に従軍したがほどなく亡くなり、ガーリブは他の親戚を頼る。13歳で結婚、19歳でデリーに上った。宮廷入りを望んだが永く叶わなかった。賭博と酒とマンゴーを好み、1841年には賭博罪で100ルピーの罰金を科せられ、47年には自宅で賭場を開こうとして再度賭博罪で逮捕、6ヶ月の禁固刑を受けた。年金訴訟や借金に追われる人生を送り、晩年はデリーの Nizām al-Dīn Auliya 廟の側に住まい、没後は住居側側に埋葬された。ウルドゥー文学史上、詩作においてミール (Mir Muḥammad Taqī Mir: 1722-1810) と双璧をなす [山根 2000; 2001b]。ガーリブについては、同時代の Sar Saiyid Aḥmad Khān (1817-98) による Khān: 121-143 にも詩句と共に紹介されている。ガーリブの生涯に関する詳細な研究書には、Ikrām 1964; Russeil & Islam 1969; Prigarina, 2000 を参照せよ。
- 2) 前任の ustād はゾウク Shaikh Muḥammad Ibrāhīm Dhauq Dihlavi (1789-1854)。ガーリブはゾウクの死後、1854年に ustād の地位を得た。ガーリブの宮廷への出入りは1850年にムガル朝史編纂に参加することになったのがきっかけだが、詩作の ustād 職については、ガーリブ自身、あまり関心を示していなかった。『ガーリブ追想 (Yādgār-e Ghālib)』(1897) を記した詩人ハーリー Maulānā Altāf Ḥusain Ḥālī (1837-1914) は当時のガーリブの様子をこう記している「1271年 (ヒジュラ暦: 西暦 1854年) にシャイフ・イブラーヒーム・ゾウクが亡くなった。皇帝の詩の添削もミルザー (ガーリブ) が行なうこととなった。だがミルザーはこの仕事についてあまり乗り気ではなかった。故 Nāzīr Ḥusain Mirzā が話していたことだが、ある日私 (Nāzīr) とミルザー氏が diwān-e 'ām に座っていると、cobdār がやってきてこう述べた、閣下 (ḥaḥūr (皇帝)) がガザル (ghazal) を所望されております、と。ミルザーは、ちょっと待て、と云い、自分の付き人 (admi) に轎 (pālki) の中の手拭い (rūmāl) に紙が数枚包んであるのでそれを持って来い、と命じた。男はすぐに持って来た。ミルザーが手拭いを開くと、中から8、9枚の紙が出てきた。その紙には一つ二つ詩句 (miṣra) が書かれていたが、それを取り出した。そしてすぐに筆入れを求め、これらの詩句につなげてガザルを書き出した。こうしてその場で座ったまま8、9篇のガザルを書き上げ、cobdār に託したのである。故ナーズィルが云うには、これら全てのガザルを書くのに、ミルザーはあまり時間をかけなかった。趣味人の ustād がガザル数篇のいくつかの部分添削するほどの時間だった。Cobdār がガザルを持って立ち去ると、ミルザーは私にこう言ったのだった、陛下からときどき所望されていたのだが、今日やっと解き放たれた」 [Ḥālī 1897: 35]。

近代ウルドゥー散文の手本と言われ、私信の域を出て文学作品として高い評価を得ている<sup>3)</sup>。書簡はガーリブが知人や詩作の弟子等へ書き送ったもので、その中には、1857年に発生し、ムガル帝国の終焉のきっかけとなったインド大反乱 (Baghāwat-e Hind) 前後のデリーの状況が浮き彫りにされている<sup>4)</sup>。そこで本稿では、ガーリブのウルドゥー語書簡を通して大反乱前後のデリーの状況を検証したい。

## I ガーリブ書簡の出版

ガーリブのウルドゥー語による書簡で現存するものは、1847年頃のものから没する1869年までに書かれたもので、94名宛合計873通ある。書簡集は版を重ねているが、Khalīq Anjumによる校訂版 *Ghālib ke Khutūṭ* [GK I-IV] が最も信頼できる版と認定されている<sup>5)</sup>。GKにおいては、ガーリブの二歳下の朋友 Mirzā Hargopal Tafta 宛が123通と群を抜いて多く、次いでラームプール Rampur の太守 (nawwāb), Nawwāb Kalb-e ‘Alī Khān (76通)、弟子の Munshī Nabī Bakhsh Ḥaqīr (71通)、Nawwāb ‘Alā al-Dīn Khān ‘Alā’ī (57通)、弟子の Mir Mehdī Majrūḥ (50通)、Rampur の nawwāb でガーリブのパトロンだった Nawwāb Yūsuf ‘Alī Khān Nāzīm (40通)、Munshī Shiv Nārāyan Ārām (36通) と続く<sup>6)</sup>。

ガーリブのウルドゥー語の書簡を出版しようとしたのは、書簡の面白さに気づいた Tafta である。Tafta は1858年11月頃、Munshī Shiv Nārāyan Ārām と共に書簡の出版を計画し、ガーリブに持ちかけたが、ガーリブは自身の詩人としての評価に傷がつくのではないかとの危惧から出版を禁じた [GK: 1062; Anjum: 23-24]。当時ガーリブは、宮廷言語であ

3) たとえば, Sadiq 1964: 275-276; Mahmud 1969: 462-463。

4) これまでの歴史研究等においても、ガーリブの詩句や書簡は、当時のデリーの社会状況を描いたものとして折に触れ引用されてきた [Gupta 1981; Bayly 1996; Jalal 2001]。なお、ガーリブの時代より約1世紀前のデリーの風物を描いたペルシア語の記録に関しては真下1998を参照せよ。

5) GKがこれまでの諸版を比較した上で編集され、ガーリブの書簡を最も多く集めたものであることは事実だが、残念なことに、校訂は十分とはいえず、地名、人名等に関する注はほとんどない。

6) なかには、イスラーム復興団体 Jamā‘at-e Islāmi を1941年に創始した思想家、マウドゥーディー Abū al-‘Alā Maudūdī (1903-1979) の親戚 Ḥakīm Saiyid Aḥmad Ḥasan Maudūdī 宛の書簡も11通含まれる。マウドゥーディーの父方の家系はイスラーム聖者につながり、母はガーリブの弟子でムガル宮廷に出入りしていた詩人サーリク Qurbān ‘Alī Beg Sālik (1824-1880) の孫娘である。マウドゥーディーは南インドのアウランガーバードに生まれ、少年期をここで過ごしたが、弁護士だった父親は家庭内でデリーの標準的なウルドゥー語を徹底的に教育したのだった。ここにはガーリブと親交のあった一族のウルドゥー語に対する情熱が伺えると共に、青年期からジャーナリズムに傾倒し、ウルドゥー語の簡明な文体でイスラーム復興を唱えたマウドゥーディーの一側面が見られて興味深い [山根 2001a: 168]。

るペルシア語とウルドゥー語の詩人としての名声を得ており、ウルドゥー語の散文で名声を得ようという意識は低かった<sup>7)</sup>。1858年11月18日の書簡では、「ウルドゥーの書簡を貴兄 [Munshī Shiv Nārāyan Ārām] は望んでおられるようだが、これも余計な事。手紙の中には、丁寧書いたものもあるだろうが、さもなくば適当に書いたもの。これで有名になるとは、我輩の詩作にケチ (shikwa) をつけるようなもの」[GK: 1062] と出版に不快感を表している。だが同時期に、イギリス人 Henry Stewart Red<sup>8)</sup> がガーリブに対しウルドゥー語の散文を書くよう求めたため、ガーリブは戸惑いを見せていた。1858年12月11日付の書簡でガーリブは、「Henry Stewart 殿にまだ手紙を書けずにおる。御仁 (Stewart) はウルドゥー散文を御所望なのだ。はて何を書けばよいのやら。しかし貴兄 (Ārām) も考えたまえ、ウルドゥーで自分の筆力をいかに示せようか。この [ウルドゥーの] 文に繊細な意味をいかに満たそうか。今もまだ何を書くべきか考えあぐねておるのだ、どんな出来事、どんな話題をいかに組み立てようか。貴兄も意見あれば我輩に教えておくれ」[GK: 1064-65] と相談を持ちかけていた。ガーリブ自身はウルドゥー語の手紙に文学的価値を見出さず、手紙と「散文作品」は別物だと考えていたのであろう。12月15日、ガーリブは Ārām に、何を書くべきか再度尋ねている [GK: 1065]<sup>9)</sup>。しかし彼自身、自分の書く書簡に対し関心が高まっていることを実感していたことや、Stewart の要請が彼の散文執筆に拍車をかけたことは間違いない。Ārām との書簡のやりとりの後、1858年12月18日付の書簡では、「Red 殿 [Stewart] は [ウルドゥー散文執筆を] お命じになる。我輩はウルドゥーで自分の能力をいかに見せることができようか。ウルドゥーに良質の文章 (‘ibārat ārā’i) の余地があろうか。あるというならあるのだろう、我輩のウルドゥーは他人に比べ流暢 (faṣīḥ) だと思う。ともかく、何とかしよう、ウルドゥーで自分の筆力を見せようというもの」[GK: 1067]、とウルドゥー散文執筆に意欲を見せ始めている。

周囲でのガーリブの書簡に対する関心が高まる中、彼の許可を得ず Caudhri ‘Abd al-Ghafūr Surūr と Munshī Mumtāz ‘Alī Khān が *Mihr-e Ghālib* [MG: abjad により出版年 H. 1278 (1861-62 A. D.) が算出される] をまとめた。MG におけるウルドゥー語の簡明且つきいきとした表現はイギリス人官吏のための語学教材として用いられることとなり、これが 1866年に、教材である *Inshā-e Urdū* の第2巻に *Intekhāb-e Ghālib* として詩句と共に掲載された。なお 1865年には16頁からなる長文の書簡が *Nāma-e Ghālib* [NG] の題

7) 1840年には、デリー・カレッジのペルシア語の教師に迎えられるところだったが、彼は断った。ガーリブは今日残っているペルシア語とウルドゥー語の詩作の多くを30代の頃、すなわち1830年代頃までに書き上げており、その後しばらくは創作活動が停滞していた。ウルドゥーの書簡は1847年のものが現存する最古のものだが、それ以前はペルシア語で書簡を書いていた。

8) 同人物の特定ができず、Red か Reid か不明。

9) この書簡でガーリブは、散文を書くことを条件に Stewart に *Dastanbū* を買い上げて貰うことを計画している。

名でデリーから刊行された<sup>10)</sup>。

1868年、ガーリブの許可の下に独立した書簡集 *‘Ūd-e Hindī* [UHa] が H. 1285 年ラジャブ月 10 日 [1868 年 10 月 27 日] 付でメーラトから出版された<sup>11)</sup>。刊行の反響は良好だったようで、翌 1869 年には再版された。再版には、「[ガーリブの] ペルシア詩は満月 (caudhwīn rāt kā cānd) の如く燦然と輝き、その名声を博しているが、ウルドゥーについては、詩集 (dīwān) が 1 冊出たのみである<sup>12)</sup>。だが彼のウルドゥー散文 (nathar) は数千倍もすばらしく、その洗練された言葉は日常を映し出している」[UHb: 94] と、その散文を賞賛した上に、前年に出た書簡集が好評を博したため、これにガーリブの弟子 ‘Abd al-Ghafūr Surūr が序文をつけ、さらにガーリブによる他人の著作に関する書評を加えたとある [UHb: 95]。こうしてガーリブは自身の書簡の価値を見出すようになり、自ら書簡の写しを提供したり、周囲に対し、書簡を出版者に提供するよう要請した。1863 年 5 月 30 日には、「この 23 通の封筒と 34 通の書状は決まり通り我輩の箱 (baks [box]) に保管したまえ。もしさらに求められれば、この書状の写しを彼に、本物を貴殿に送ることにしよう」[GK: 403] と述べ、また 1863 年 6 月 21 日には、「我輩は書簡を貴殿宛として一まとめで彼 [Mirzā ‘Alī Ḥusain Khān] に渡した。貴殿に渡すか否かは彼に託した」[GK: 405] と書くなど、書簡を積極的に提供している。

その後ガーリブの弟子 2 人、Majrūḥ と Qurbān ‘Alī Beg Sālik [1824–1880] による序文が添えられて出版された書簡集 *Urdū-e Mu‘allā* は 1869 年 3 月 6 日、ガーリブの没後 19 日目に出版された。書簡集は題名を変えたり選集になるなど、これまでに多くの版が出されてきた<sup>13)</sup>。

ガーリブの書簡には詩の添削や詩集や書簡の出版に関する話題の他、ムガル宮廷やイギリス政府からの年金 (pensan; penshan) 支給に関する言及や生活全般の話、あるいはインド大反乱後のデリーの状況が当時の口語で描かれている。

なお、ガーリブの書簡の英訳版には Russel and Islam 1969, Rahbar 1987 があるが、前者はガーリブの書簡とペルシア語の日記 *Dastanbū* を用いてガーリブの生涯における事実関係を明らかにしたもので、後者は 170 通の書簡の英訳である<sup>14)</sup>。

10) NG はリトグラフ版で総頁数 16、大英図書館所蔵。(筆者確認) (14117.6.10)。巻末に、Mirzā Raḥīm Beg 当てる書簡が、デリーの Maṭba‘ Muḥammadi Muḥammad Mirzā Khān より刊行されたと記されている。なお *Nāma-e Ghālib* は [Dā‘udī 1967: 147–173] に採録されている。

11) 大英図書館所蔵。UHa はメーラトより出版されたリトグラフ版で総頁数 188。UHb はメーラトからの 1869 年の再版で、1878 年にデリー版、同年カーンプール版が刊行された。(いずれも筆者確認)。デリー版、カーンプール版共にメーラト版のコピーである。

12) Rizā: 7–8 によれば、ガーリブのウルドゥー語詩集は 1841 年に初版が出て以来、1863 年までに 5 版が出ている。

13) たとえば、RG; Nizāmi 1921; Mihr 1969 など。

14) Russel and Islam 1969 は、ガーリブの生涯に焦点が絞られており、大反乱時の状況に関して、彼の著述活動や年金獲得に関わるイギリス政府との折衝の様子が浮き彫りにされている。

## II 大反乱当時のガーリブについて

1857 年 5 月 11 日, インド大反乱の兵士がデリー入りしてデリー市内の治安が悪化すると, ガーリブの友人や弟子の多くはデリーを脱出した。だがガーリブは大反乱の前後約 3 年, 市壁に囲まれた Shāhjahānābād 内の街区 Ballimārāṅ の自宅に籠り, 1857 年 5 月 11 日より 58 年 7 月 21 日までの出来事を, ペルシア語の日記 *Dastanbū* に記し, 1858 年に出版した [GK: 584; 986]<sup>15)</sup>。大反乱以前, 彼はザファル帝の詩作の師匠として宮廷に出入りしていたが, 1854 年にイギリスがザファル帝の後継者はないとの決定を下すと, ガーリブは *Dastanbū* においてデリーの破壊を嘆きながらも, イギリスの保護を求めてイギリスへの忠誠を示し, 巻頭にはペルシア語によるヴィクトリア女王への頌詩 (qaṣīda) も付してこれを 1858 年 11 月にアングラから出版, Lord Canning を通して女王にこれを献上した他, イギリス人官吏にも送った。同様に, ガーリブは大反乱制圧後のデリーの commissioner, Ajerton に対しても 1858 年 10 月にウルドゥー語で頌詩を献上している [GK: 1058-1059]。イギリスから再度年金を支給されるには大反乱制圧 [1857 年 9 月 20 日] 後 2 年半以上待たねばならなかった<sup>16)</sup>が, 新たなパトロンを求めて執筆に取り組むガーリブの逞しさが伺える<sup>17)</sup>。

*Dastanbū* 執筆後, 即ち大反乱鎮圧後に郵便制度が復活すると, ガーリブはウルドゥー語による書簡を再度書くようになった。この時期の書簡には荒廃したデリーの様子, 特に Shāhjahānābād の状況が, 都への強い郷愁と共に描かれている<sup>18)</sup>。

## III テクストの翻訳

### デリーの惨状

貴兄はこれが何事で, 何が起こったかを知っておるか。我輩と貴兄が友だった時代は過ぎ去ったのだ。

15) ガーリブは, 1858 年 11 月頃の書簡で *Dastanbū* は, アラビア語語彙を一切入れず, ペルシア語のみで書き上げたと自慢している [GK: 801; 986]。

16) イギリス政府から年金が出たのは 1860 年 5 月のことだった。

17) [GK: 508] にイギリス側から礼状が届いたとの記述がある。

18) なお, 当時デリーに住んでいたウルドゥー詩人達は, デリーの没落を悼む詩 *shahr āshob* を記し, 『デリーの嘆き *Fughān-e Dihlī*』という題名の, 複数の詩人による詩集を出版させている。Shahr āshob 研究に関する近年の成果としては, 久保 2001 を参照せよ。特にウルドゥー文学における *shahr āshob* については, 'Abd Allāh 1965; Na'im 1968; Yamane 2000; 山根 2000 を参照。当時の詩人は, デリーの没落を嘆きつつも, ガーリブ同様, イギリス政府による復興を称え, イギリスによる保護を期待していた。この他, 当時の状況に関するウルドゥー語の資料としては, Niẓāmī 1919; 1920-a; 1920-b, 新聞を集めた *Ṣiddīqī* 1966, 大反乱当時の兵士 *sipāhī* の書簡集 *Qureshi* 1999 が公刊されている。未公刊のものには, 大英図書館所蔵の AG I, II, III がある。

我輩と貴兄は色恋を経て詩を詠み、詩集を編んだもの。あの時代、我と貴兄にはデリーに友たる年長者あり。その名を Munshī Nabī Bakhsh, 雅号をḤaqīr と称したり。それが突如あの時代が失せ、かの人々も消えたのだ、あの出来事も消え、交わりもなし、遊びもなし。しばらく後に我らは別の時代を迎えることとなった。とはいえ [我らが] 様は、前の時代を鏡に映したが如きである。即ち、我輩が一通の書状を Munshī Nabī Bakhsh 殿に送ったところ、その返信が我に届いたのである。また一通の書状、貴兄、Munshī Hargopāl, Tafta を号する者より本日落掌。我輩の住む町をデリーと云い、その街区 (muḥalla) の名を Ballimārān kā muḥalla と呼ぶが、あの時代の友は一人として得られぬ。ああ神よ、探しあぐねてもこの町でムスリムに出会うことは無し。富める者、貧しき者、職人、居る者全てが余所者 (bāhar ke) なのだ。他方ヒンドゥー達 (Hunūd) は僅かずつながら住みだはじめた……大袈裟と思うなかれ。富める者、貧しき者、皆逃げ出してしまった。残った者は追い出された。Jāgīr-dār, 年金受給者 (pensan-dār), 金持ち (daulatmand), 職人 (ahl-e ḥarfa), いずれも無し。詳しく様を書けば、我輩は怯えを覚える。[1857年12月5日, GK: 266-267]

貴兄 (Ḥakīm Ghulām Najaf Khān) も知るとおり、我輩の町に住むには、お上 (sarkār) の許可なしにはかなわぬのだ、外出するにもチケット [許可証] なし (be-tikaṭ) ではいかぬのだ。されば我輩は何としよう。どうしてそこに行けるというのか。貴兄がこの町にいるというのなら、勇気を出して貴兄の許に行くものだが、Sher Zamān Khān 殿は一度来て、また来るとは言うたものの、その後来たらず。[1858年2, 3月 GK: 627]

ムスリムの男 (ādmi) は町を許可証 (tikaṭ [ticket])<sup>19)</sup>無しには歩けず。[1858年3月5日, GK: 270]

……さらに怯え、辛き折にはこの詩句を読み黙るなり。

ああ 突如出でたる死よ そなたは何を待つや

我輩が、味わいのない、破滅の哀しみのうちに死ぬとは思うなかれ。痛みの話は我輩も知っておる、我輩が述べたいのはかかる痛みのお話である。イギリス人のうち、黒き顔<sup>20)</sup>の手にかかって殺された者の中に、我輩の期待していた者があったのだ、親友、友人、気の置けぬ友、弟子もまたあった。インド人 (Hindustāni) にも友あり、弟子あり、恋人あり。それが、これら皆がなべて土に帰してしまった。親しき者1人の死の悼みはまことに苦しいもの。[我輩は] 多くの親しい友を失い嘆く身にあって、生きるのが易しいはずもない。ああ、かくも多くの友が亡くなるとは、今我輩が亡くなっても、我輩のために泣くものさえ残っておらぬ。[1858年6月か7月, GK: 281]

ともかく、この町の様子 (akhbār) を聞きたまえ。命令が下り、11月1日月曜日の夜に、イギリス人殿たちがそれぞれの家に明かりを灯し、パーザールや [デリーの] コミッショナー閣下 (ṣāhib-e kamishonar [commisioner] bahādur) のお屋敷 (koṭhī) にも明かりを灯すことになるとのこと。小生 (faqīr) も18ヶ月年金を得ておらぬが、ともかく家に明かりを灯すことになるだろう。そこで市のコミッショナー閣下に15句 (bait) になるキタア (qīṭa') を書いて送っておいた。[1858年10月1日, GK: 1058]

19) 大叛乱時デリーを離れた住人が再度居住するための許可証 [Rahbar: 448]。

20) インド人。

1857 年 5 月 11 日、この地に騒乱が起こったその日より、我は家の戸を閉め、行き来を止めた。何もせず過ごすというのは辛きものである。[1858 年 11 月 18 日, GK: 584]

チョークのベーガム公園 (Begam ke Bāgh) の入り口前の貯水池 (ḥauz) 脇に井戸があったが、そこには瓦礫を入れられ閉ざされた。Ballimārān の入り口脇に在った店数軒は壊されて道が拡張された……町での噂では、1859 年初めに人々が町に住むとのこと、また年金受給者には望むがまま受給されるとのこと。[1858 年 12 月 22 日, GK: 500-501]

この町には日毎新たな掟の生まれたる 先のことなどわかるべくもなし

メーラトより戻ってみれば厳しき様子である。白人の保護にも心は安まらぬ。ラーホーリー門の巡査 (thānedār) が墓塚 (mondha) を敷いて道に座り、外から白人の目を盗んで [Shāhjahānābād 内に] 入り来るのを捕えては入牢させている。Ḥākīm は [違反者への罰として] 5 回の鞭打ちか 2 ルピーの罰金、あるいは 8 日間の拘留を定めた。さらに派出所 (thāna) に命じたのは、誰が居住許可証無しで住み、誰が許可証を所持しているかを調べることだ。派出所ではリスト (naqsha) が作られた。この地の jam'adār も我輩の元にやって来たので、我輩はこう答えてやった、さて、貴兄は我をリストに書き込まなくてよい。我輩については別にこう書くべきである、即ち、「年金受給者アサドゥッラー・ハーンは 1850 年より Patiala の ḥākīm の兄弟の邸宅 (ḥaveli) に住んでおる。黒人<sup>21)</sup>の時代にいずこに出たこともなければ、白人の時代にも出たことはなし、また [イギリス政府によって] 出されたこともなし。Burne (Barn)<sup>22)</sup> 大佐閣下の口頭での命により同人の住まいは定められた。これまでいずれの ḥākīm もこの命を変えておらぬ。ここに現 ḥākīm の権限のあるのみ」と。一昨日、この一文を jam'adār は街区 (muḥalla) の住人リストと共に koṭwālī に届けた。昨日命下りたところでは、町の外に家屋敷を構えた場合は、その家を壊すこととなる由。今後は [Shāhjahānābād の外に家を建築することを] 禁ずる旨を知らしめた。また、[Shāhjahānābād 内への居住許可証が] 5000 ルピーで発行された。ムスリムで市内に住まうを望む者は支払うべし、ということだ。その支払方法を定めるは ḥākīm にあり。金を出して許可証を得よ、という。町に住むなら家は [5000 ルピーの負担で] 破滅。さて、町に住むのに吉祥の時間 (mahūrat) が訪れようか。住まう者さえ追い出されるというのに、外に住む者が町に戻ろうか。[1859 年 2 月 2 日水曜日, GK: 501-502]

かの地 [ラクナウー] のコミッショナー (ṣāḥib-e kamishonar bahādur-e a'zam) は、役人 ('umlā) がヒンドゥーで溢れているのに気づかれた。ムスリム (ahl-e Islām) はいなかったのだ。そこでヒンドゥーを他の地域に送り、代りにムスリムを増やされたのだ。これ [ムスリムを役人に復帰させる案] はデリーの災難に対しては起こっていない。ラクナウーの他、全ての町では、大反乱 (ghadar) 以前の状態となった。今ここでは許可証 (ṭikaṭ [ticket]) が発行された。我輩も見た。ペ

21) インド人を「黒人 kāle wāle」、イギリス人を「白人 gore」と呼んでいた。

22) GK: 887 によると、UM では Braun (Brown) となっているが、実際は Barn (Burne) である。DI: 62 によると、Sir Owen Tudor Burne は 1837 年生まれで、1855 年にイギリス軍入隊、インド大反乱に従軍し、ラクナウー陥落にも参加した。1869 年から 72 年までインド総督 Lord Mayo の個人秘書を務めたが、この書簡の時期の職務については言及がない。1861 年に Lord Strathnairn の軍事顧問 (Military Secretary) だったとある。

ロシア語でこう書いてあるのだ。「デリー市内の居住許可、但し内部〔での居住〕には支払いが条件 (ba-sharaṭ-i adkhāl-e jurmāna)」[1859年2月 GK: 504]

インド (Hindustān) の帝国 (qalamrav) は光を失った。数十万人が亡くなり、生ける者は、数百万人が逮捕された。生きている者には力 (maqḍūr) がなくなっている。[1859年4月19日, GK: 1071]

〔我輩の地区の〕人の賑わいはまた減った。ラーホール門 (Lāhori Darwāza) の地区の、百軒弱の家に人が住んでいる。数千戸の村 (basti) になった。数年内にこの地区にも人の住むこととなるだろう。この地に人が住めば、他の地区でも〔住人の帰還が〕始まるであろう。慌てるべからず、急ぐべからず。[1859年6月18日, GK: 674]

Āghā Bāqir の Imāmbāra は、神の〔作った〕嘆きの館 (khudāwand kā ‘aza khāna) である以上に、有名な古き礎としても知られてきたものだ。これが破壊される哀しみを感じない者があろうか。ここには今2本の道が走るという。一本は並木道 (thandī saṛak)<sup>23)</sup> で、もう一本は鉄道 (āhni saṛak) である。それぞれの〔道の〕位置は離れ離れになるとのこと。それよりも一大事なのは、白人の兵舎 (barak) も町 [Shāhjahānābād] 内に出来るということだ。そして宮城の前のところ、Lāl Ḍiggī のある場所が更地 (maidān) になるという。Maḥbūb の店並、牛車 (bheliyon) の小屋 (ghar), 象舎 (Fil Khāna), Bulāqī Begam の kūca から Khāṣ Bāzār まで、これが全て更地になるという。つまり、Ammu Jān の門から宮城の堀 (khandaq) まで、Lāl Ḍiggī といくつかの井戸以外の建物は跡形もなくなるであろう。本日、Jān Nithār Khāṇ の屋根つきの通り (chatta) の家並 (makān) が取り壊され始めた。デリーが荒廃する時に我輩が悲しまぬはずがない。もし町の市民 (ahl-e shahr) でいられなくなるなら、いっそ町を取り上げて竈にでも放り込もうか。[1859年7月28日, GK: 771-772]

〔デリー市内への〕往來の許可証は廃止となる。乞食 (faqir) と武器を持つ者は入るのを許されず、残るヒンドゥー、ムスリム、男女、乗り物に乗る者、徒歩の者、望めば入り得て、出で得る。だが居住のチケットなしには、夜間、町に住むのを許されぬ。賑いし所は道路となる。白人の管区 (chā’oni) が町内部にできるそう。とはいえ何も変わらず。どうにか Jānithār Khāṇ<sup>24)</sup> の所に屋根付の道が出来たところ。デリーの住人はラクナウを馬鹿にしておる。数十万の家屋が取り壊され、跡形無き広場になった、と。[1859年8月18日, GK: 774]

町の様を知る由も無い。Paun Ṭuṭī<sup>25)</sup> なるものが施行された。穀物 (ghalla) と牛糞 (upla) をおいて税 (maḥṣūl) のかからぬ物はなし……ジャーマ・マスジド界限は25フィート四方の広場になる由。店屋や邸宅は取り壊されるらしい。「永遠の館 (dār al-Baqā)」は消えようとしている。ただアッラーの名のみ残るのだろう。Khān Candar の路地 (kūca), Shāh Bolā のバニヤン樹も無くなるようだ。双方から鶴嘴が振り下ろされておる。他は無事。[1859年11月8日, GK: 512-513]

この頃この地にはバンジャープ地域の ḥākīm が来た。Paun Ṭuṭī [Town Duty] に関する konsal [council] が開かれた。一昨日、11月7日に施行された。Sālik Rām Khazānci, Chunnā Mal,

23) 並木で木陰のできる道を「涼しい道 (thandī saṛak)」と呼んだ。

24) GK: 771-772 に出てくる Jān Nithār Khāṇ であろう。

25) 入市税 (Town Duty) の訛り。

Mahesh Dās の三人が責任を持って (ṭariq-e āmani) この職務を担当する<sup>26)</sup>。穀物 (ghalle), 牛糞 (uple) の他税のかからぬ物はなし。[自由に] 居住できる命令が下った。人の波が押し寄せてきた。かつてのおふれでは、持ち家の主は住んでもよいが、間借りする者は住んではだめとのことだった。一昨日のおふれでは、間借り者も住めるという。ただし、何人も自宅に間借り者を置くことは許されぬ。家の nishān を持たぬ者や間借りを続ける者も戻り始めた。ただ家賃は sarkār に支払うこととなる。[1859 年 11 月 9 日, GK: 679]

デリーの人、特に王家の貴族 (umrā'e shāhī) はどの町に行っても悪名高く、人々は皆彼等の影から逃げておる。[1859 年 11 月 29 日, GK: 779]

何をや訊くのか、何を書き記そうか。デリーの町は幾多の騒乱に苛まれたのだ。宮城、チャンドニー・チョウク、日毎のジャーマ・マスジドの集い、週毎に賑わうジャムナー川の橋の憩い、毎年の花祭<sup>27)</sup>、この五つは最早なし。さればデリーよいずこ。かつてその帝国にその名のありき。[1859 年 12 月 2 日, GK: 514-515]

太守殿 [Nawwāb Dhū al-Fiqār al-Dīn], 一昨日朝、貴殿の書状が落掌いたした。その日の午後 Lāḍ Ṣāhib [Lord Sahib] の軍勢が来たるカーブリー門の壁の近く、Bholo Shāh の墓所の前では上等の天幕が張られた。残りの軍勢 3 万は庭園まで降りてきた。1859 年 12 月 29 日木曜日のことである。さて、ガーリブの苦難の物語をお聞きください。一昨日貴殿の書状を読んで軍勢 [の方] に向かい、秘書 (mir munshi)<sup>28)</sup> に会った。御仁の天幕に座り、秘書殿 (ṣāhib sekretar-e bahādur) に [自分が来たことを] 報さす。小間使いと共にカッルー (Kallū)<sup>29)</sup> も行っておった。[先方より] 返答があり、[先方からの] 挨拶が伝えられ、[面会の] 暇はないとのこと。それで我輩は自宅に戻って来たのである。昨日再度参じ、[先方に参上したと] 報せた。命が下って [面会すると]、叛乱の折、貴様は叛乱軍に媚っていたではないか、今我等と会うのをなぜ求めるのだ、という。この世に暗黒が垂れ込めてしまった、願いは永遠の絶望となり果てた。Darbār なく、褒美の衣もなし、年金もなし。[1859 年 12 月 31 日, GK: 516]

Lāḍ Ṣāhib [Lord Sahib] の darbār がメーラトにて催された。デリー地域の jāgīrdār, デリーのコミッショナーは命によりメーラトに出向いた。[darbār の] 古い慣わしにのっとって会いに行ったので

26) Gupta: 235 には、Dehli Municipality のメンバーのリストがあり、Chunnā Mal は 1863 年から 1870 年まで、Mahesh Dās は 1863 年から 1874 年まで努めている。いずれも banker で、おそらくはガーリブの書簡の人物と同一であろう。

27) 「花祭 phul wālon kā melā」は、Dihlavi 1918: 558 によると、ムガル皇帝アフマド・シャー二世 (Aḥmad Shāh Thānī) の皇子 Mirzā Jahāngīr がイギリス政府により Alahabad に左遷されたとき、王妃 Mumtāz Maḥal は皇子がデリーに戻るのを懇願し、もし皇子がデリーに戻ることが叶えば、聖者 Khwāja Quṭb al-Dīn Bakhtiyar Kākī の霊廟を花で飾ると誓った。この霊廟の近辺には皇帝の建造物があり、特にアクバル・シャー二世は雨季になるとこの地で過ごすのを好んでいた。王妃の願い通り皇子の復帰が実現すると、王妃は霊廟を花で飾り立てたが、このとき城内のみならず、デリー中の人々も皇子の復帰を喜び、その後毎年サーワン月になると、この霊廟を花で飾る祭が始まったという。Kākī 廟の写真は、Khān 1990: 65; 81 に掲載されている。

28) インド人秘書。

29) ガーリブの使用人カリヤーン (Kaliyān) の愛称。

ある。12月29日木曜日の日が高くなった頃、Lād Şāhib [Lord Sahib] がこの地に着き、カーブリー門 (Kābli Darwāza) の市壁の下に天幕を張った。まさにその頃、大砲の音を聞いたので、すぐに我輩は〔乗り物に〕乗りこんだ。インド人事務官 (mīr munshī) に会い、その天幕に座って、イギリス人事務官 (şāhib sekretar) に〔ガーリーブが面会に来たと〕伝えた。〔すると〕暇なしとの返事が戻ってきた……ムスリムの財産返還の命が下りた。借りていた者は、その借り賃を免除されることとなった。[1860年1月1日, GK: 516-517]

ラクナウ (Lakhna'u) の荒廃には心が痛む。だが貴兄も覚えておろう、かの地は騒乱の後、道は広くなり、バーザールが良くなるであろう。見る者は皆それを褒めるだろう。そしてデリーの騒乱の後、〔これを褒める者は〕誰もおらぬだろう。この地は、騒乱に次ぎ騒乱、町の面影は、宮城のラーホーリー門から町 [Shāhjāhānābād] のラーホーリー門までのこのバーザール<sup>30)</sup>以外、悉く壊され、壊されつづけるのだ。[1860年6月11日, GK: 547]

家並みやモスクの破壊の様を何と書き記そうか。この町 [Shāhjāhānābād] を作った者<sup>31)</sup>は、家屋を作るのに心血を注いだであろうが、今のこの国の主<sup>32)</sup>が取り壊すのに注ぐ心血ほどではなからう。ああ、アッラーよ。宮城のほとんどの建物、そして町のいくつかのシャージャハナーバード時代の建物 (Shāhjāhānī 'imārten) は鶴嘴が悉く取り壊してしもうた。それどころか、宮城では、そのような道具は役に立たぬので、爆薬が埋められ<sup>33)</sup>、火薬が撒かれ、強固な (sangin) 建物は吹き飛ばされた。[1860年8月24日, GK: 993-994]

ここでは町が取り壊されている。良く知られた大きなバーザール、Khāṣ Bāzār, Urdū Bāzār, そして Khānam Bāzār は一つ一つが村 (qaṣba) [ほど大規模] だった。だが最早どこにあったかもわからぬ有様だ。住人達や店主達は、自分の家が何処にあったか、店が何処にあったかを言えぬのだ。[1860年9月, GK: 607]

嗚呼、今やデリーの住人とは、ヒンドゥー (Hindū), 職人 (ahl-e ḥarfa), ハーキー (khākī)<sup>34)</sup>, パンジャービー (Panjābī), 白人 (Gorā) である。かかる輩の〔話す〕言葉を誰が褒めようか。ラクナウの町にはさしたる変化もないという。[アワード] 王国は滅べども、その道に秀でる者はこれ残っている。香り高き葦簀は、東風は今いずこ。あの趣はこの屋敷にてこそ得られるものであった。Mir Khairāti の邸宅は在りし日の面影を残しておらぬ。然り、時は移ろうものなり。難儀なのはカーリー井戸 (Kālī Kunwān) が枯れたこと。ラール・ディギー池 (Lāl Diggī kī Kunwen) の井戸水は、皆悉く塩辛くなってしもうた。詮方無く、塩辛きまま〔水〕を飲んでおる。その水は熱し。一昨日、〔轎に〕乗り<sup>35)</sup>、井戸の様子を見ようとい出してみる。ジャーマ・マスジド (Jame' Masjid) よりラー

30) チャンドニー・チョウク周辺。

31) ムガルの皇帝。

32) イギリス。

33) 取り壊しのための爆薬を地面に埋めること。

34) インド人傭兵。

35) 「轎(かご)」は, Hālī 1897: 35にあるように、担い籠 (pālki) と思われる。[ベルニエ: 238]にある、「有蓋で、中にいす一個がある小型の駕籠。前後から二人の人間が轎を持ち上げて運ぶ」と同一であろう。なお, Dr. Tabassum Kāshmirīによると、轎には pālki と nālki があり、pālki は

ジ・ガート門 (Rāj Ghāṭ Darwāza) まで、大袈裟に言わずとも、これ砂漠の如し。煉瓦の山積み取れば、不毛の地となろう。Mirzā Gohar の小庭 (bāghīce) のこちらに竹数本分の (幅の) 低地のあったのを覚えておるか。あれは最早 [煉瓦などに埋もれ] 小庭の平地と高さを同じうする。ラージ・ガート門は [瓦礫に埋もれて] 閉ざされたり。市壁の [上部の] 飾りが見えるのみ。カシミリー門 (Kashmirī Darwāza) の様は貴兄も見たことであろう。今やカルカッタ門 (Kalkatta Darwāza) よりカーブリー門 (Kāblī Darwāza) に至るは更地と成り果てぬ。パンジャービー横丁 (Panjābī Kaṭra), ドービー長屋 (Dhobī Wāra), ラーム・ジー・ガンジ (Rām Jī Ganj), サアダト・ハーン横丁 (Sa'adat Khān kā Kaṭra), 將軍夫人の邸宅 (Jarnel kī Bibī kī Ḥavelī), 集荷屋ラームジューダースの家並み (Rām Jī Dās Godām Wāle ke Makānāt), サーヒブ・ラームの庭園 (Ṣāhib Rām kā Bāgh), 邸宅 (ḥavelī), これ全て跡形も無し。即ち、都は砂漠となってしまうのだ。さらに井戸は枯れ果て、水は貴石の如く [得がたいものと] なったので、砂漠は [悲劇で知られる、水の無い] カルバラの砂漠となり果てた。アッラー、アッラー、デリーは消えたというのに、デリー人はいまだにこの地の言葉を誉めそやしている。嗚呼、目明きよ、神の下僕よ、ウルドゥー・バーザール (Urdū Bāzār) 無きあとに、ウルドゥーはいずこ。嗚呼神よ、デリーは最早都にはあらず、キャンプ (Kamp) なり、軍営地なり。宮城も無く、町も無く、バーザールも無く、水路さえも無し<sup>36)</sup>。[1860年, GK: 524]

5つの軍勢がこの町を立て続けに侵攻した。最初は叛乱軍 (bāghī) の軍勢、これで市民 (ahl-e shahr) の居場所 (e'tebār) が奪われた。第2は傭兵 (khāki) の軍勢。これで生命、財産、家族 (nāmūs), 家、住人、空も大地もこの世の全てが悉く奪われた。第3は飢饉 (kal) の軍勢。これで数千人が飢えて亡くなった。第4はコレラ (ḥaiza) の軍勢。これで多くが腹を満たしながら亡くなった。第5は熱 (tap) の軍勢。これで体力活力が奪われた。死んだ者は少ないが、熱を出すと身体の力が抜けるのだ。今を以ってこの軍勢はこの町を去っておらぬ。我が家では二人がこの熱に罹っておる。一人は長男坊 (baṛā laṛkā)<sup>37)</sup>, もう一人は我輩の小間使いの長 (dārūgha)。どうか二人とも早く健康になりますように……あはははは、Hāfiḡ Muḥammad Bakhsh 殿、我が祈りを受けたまえ。Mughal 'Alī Khān は反乱の少し前に水腫 (mustasqī) に罹って亡くなった。ああ、何と記せばよいのやら、Ḥakīm Raḡā al-Dīn Khān は民衆の虐殺 (qatl-e 'ām) の折、傭兵 (khāki) が銃を発砲して殺した。そして Aḥmad Ḥusain Khān の弟もその日に殺された。Ṭal'a Yār Khān の息子は二人とも、Ṭonk から辞去して戻ってきたが、反乱のせいで行けず、ここに留まった。デリー制圧後、この二人の無実な

↘ 日本の江戸時代の駕籠同様、駕籠が担ぎ棒の下に位置するもので、nalki は駕籠が担ぎ棒の上に位置するものであるという。近藤治 1977: 189 に駕籠に乗ったイギリス人の写真が紹介されている。

36) この書簡には日付がない。Khaliq Anjum は、(1) この書簡にアレキサンダー・ハードリーの記述があるが、同人の没年が1861年7月7日である。(2) デリーの区画整理は1860年に始まった、ことを理由に、書簡の書かれた年を1860年に推定している [Anjum: 895]。

37) ガーリブ夫妻には7人の子供が生まれたが、皆亡くなったため、妻 Umrā'o Begam の甥 Zen al-'Ābidīn Khān 'Ārif を養子に迎えていた。だが 'Ārif も1852年に亡くなった為、'Ārif の子供二人 Bāqir 'Alī Khān (1847年生) と Ḥusain 'Alī Khān を養子に迎えた。子供たちの墓はガーリブの墓のそばにある [Rām 1977: 16-17]。

る者は絞首刑にされた。Ṭal'a Yār Khān は Ṭonk に居る。生きておる。しかし、死ぬより酷い様子にあらうことは疑いない。Mir Choṭam も絞首刑となった。Şāhibzāda Miyān Niẓām al-Dīn の様子といえは、町のお偉方が皆逃げた所へ、御仁も逃げた。Baṛode に行ったり Aurangābād を訪ねたり、Ḥaid-arābād に寄ってみた。昨年、即ち冬にここに帰ってきたが、お上(sarkār)は御仁を無実と判じたものの、命だけが残ったようなもの。Koṭlwāli Cabūtra の裏手にあった Roshan al-Daulā のあの madrasa, 故 Mughal 'Alī Khān が住んでいた Khwāja Qāsim のあの ḥaveli, あれは元々 Ḥaẓrat Kāle Şāhib の所有だったが、Kāle Şāhib の後 Niẓām al-Dīn の手に渡り、その後競売にかけられてその売上は sarkār に収められた。[1860年, GK: 989]

カシミリー横丁 (Kashmiri Kaṭra) は荒れ果てた。嗚呼、あの高き戸口、あの大きな屋敷はいずれも見当たらず。一体何が起こったというのだ。鉄道 (āhni sarak)<sup>38)</sup> の敷設は未だ延期のままにある。[1861年1月9日, GK: 522]

町は静まりかえておる。どこにも鶴嘴の音は響かず、穴を開けて家を壊すものでもない。鉄道 (āhni sarak) が敷かれる様子もなし、砲台が盛られるもなし。デリーは沈黙の町になっている。[1861年9月22日, GK: 533]

昨日、貴兄[Nawwāb 'Alā al-Dīn Aḥmad Khān 'Alā'i] の書状に、デリーが大きな町で、あらゆる人がそこにいるだろうとの言葉を再び見た。ああ、我が友よ。これはかかるデリーには非ず。貴兄の生まれたデリーには非ず。貴兄が学んだデリーには非ず。貴兄が Sha'bān Beg の邸宅 (ḥaveli) まで、我輩に学ぶために訪れていたあのデリーに非ず。我輩が7歳の時より行き来していたデリーには非ず。51年住んできたデリーには非ず。これはキャンプ (kamp) なのだ。ムスリムの職人 (ahl-e ḥarfa) や ḥukkām の弟子、残りも全て無し。玉座を奪われた皇帝は生き残り給いた。毎月5ルピーを得ておられるとのこと。[1862年3月1日, GK: 383-384]

御仁の行方は知れぬまま。見たところ雨季が、[デリーに] 到来するのを阻んでいるようだ。雨季の名が出たところで、先ずは少し聞きたまえ。黒人 (kāle)<sup>39)</sup> の叛乱が起こり、次いで白人の騒ぎになった。家屋の崩れ落ちる騒動が起こり、疫病の災難となった。さらに飢饉の困難が訪れたのである。今やこの雨季は、それら全てを集めたようなもの。本日は [雨季に入って] 21日目なり。太陽は雷光が如く [わずかの間だけ] 見えるのみである。夜、星が見えれば、人はそれを蛍とってしまうのだ。暗闇の夜は泥棒の稼ぎ時となり、数件の盗みを聞かぬ日はない。大袈裟に思うな、千の家屋が崩れ落ちたのだ。数百の人が、ここそこで下敷きとなって亡くなった。小路という小路は川となって流れたのだ。即ち、雨の降らぬは食糧飢饉 (an kal) なり、そして、穀物の育たぬ、こは水飢饉 (pan kal) なり。雨が凄まじく降るために、植えた種を流してしまったのだ。未だ植えていない者は、植えるのを止めてしまったのだ。さあ聞いたかな、デリーの様を。[1862年7月29日, GK: 534-535]

この町にある祭りで、花祭 (phūl wāloṅ kā melā) と呼ばれるものがある。バードン月に催されるもので、町の貴族 (umrā) から職人まで、クトップ様 (Quṭb Şāhib) に出向いていった。[皆] 2, 3週間その地にとどまるのである。町にあるムスリム、ヒンドゥーいずれの firqa の店も閉じたままに

38) 原語は「鉄の道 āhni sarak」。

39) インド人。

なっている。Bhā'ī Ziā al-Dīn Khān, Shahāb al-Dīn Khān に我輩の許の二人の男も皆 Quṭb Shāhib<sup>40)</sup> に出掛けたまま。いま応接間 (dīwān khāna) には我輩と小間使いの長 (dārūgha) が一人、それに病気の使用人 (khidmat-gār) 1人が残るのみ。[1864年10月11日, GK: 659]

### 郵便事情

この書状をしたため、受取人払い (be-rang)<sup>41)</sup> にて発送した。貴殿も返書を受取人払いにて送るべし。半アンナなど大枚ではござらぬ。郵便屋 (dāk ke log) は受取人払いの書状を重要と考えて早く届けるのだ。前納郵便 (post paid) は放置されてしまうぞ。[1853年3月28日, GK: 252-253]

昨日9時10時に郵便を出した。[1853年3月, GK: 253]

貴兄に書状を書き送り、その3日後に Hardev Singh より嘆願状 ('arzi) と25ルピーの受け取り、並びに500ルピーの手形 (hundvi) が届いた。[1853年6月14日, GK: 259]

もし貴兄 [Haqir] の書状が前納郵便 (post paid) で届くなら、我輩は嬉しさを覚えぬ。受取人払い (be-rang) にて送られよ。そして Munshi Hargopal [Tafta] にもそう伝えよ。いや、この手紙を見せるがよい。多くの受取人払いの手紙が紛失してしまうのだ。[我輩は] 受取人払いを信頼しておる。[1854年6月4日, GK: 1143]

貴殿より11月15日付の書状、本日、即ち11月18日木曜日にここに届く。Marhara の書簡はデリーに4日で着く。Hardo'vi の書簡が Marhara のものより何故遅れて着くのだろう。さあ喜びたまえ、この手紙は受取人払いにて送るぞ。だが小生には、いつ届いたかを報せたまえ。[1860年2月3日, GK: 629]

貴殿の書状の返事を書くことができぬ。返信を書くところだが、カリヤーン (Kaliyān)<sup>42)</sup> の足が脹れて歩けぬのだ。[1858年3月5日, GK: 270]

不思議な偶然もあるもの、4月22日木曜日に Kaliyān が手紙を出してくると、その後ろを小包の配達夫がやって来て、貴兄のポケット (pakiṭ)<sup>43)</sup> を持って来た。受け取り (rasid) を書くのも無駄と思い、包みを見始めたのだった……本日、貴兄の詩句の紙をパンフレット・ポケット (pamphlet pakiṭ [Pamphlet packet]) にてこの書状と共に郵送した。この書状は明日、明後日のうちに、ポケットは4、5日のうちに届くことになる。[1858年4月25日, GK: 274]

4月25日に一通の手紙と小包 (parsel) を送った。本日は30日、既に手紙も小包も届いたことと思います。[1858年4月30日, GK: 274]

我輩に何故怒っておるのか。本日か、あと数日で、貴兄 (Tafta) の手紙を貰って丸ひと月になるではないか……よいか、毎月1通、我輩に手紙を書くことを義務としたまえ。もし何か用あれば2通、3

40) 花祭は Khawāja Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī 廟で開かれたため、「クトゥブ様 (Quṭb Shāhib)」と呼ばれた。

41) 受取人払いの消印が黒色だったことから「色なし be-rang」と呼ばれた。後述考察を参照せよ。

42) ガーリブの使用人。

43) ガーリブは「小包」として pakiṭ と parsel の2語を用いている。Dr. Tabassum Kāshmiri によると、pakiṭ [packet] はやや大きめの封書など紙で包んだ郵便物で、parsel [parcel] は、布で包んだ郵便物を指す。

通、用なければ、ただ元気だと書くべし、毎月1度は書きたまえ。[貴兄の] 兄上からの手紙も10日以上届いておらぬ、返事は出したきりになっているぞ。[1858年6月19日, GK: 276]

Mirzā Tafta に祈りが届きますように。何日も経つのに、何故手紙を書かぬのか。ア－グラにいるのか、いないのか。Mirzā Ḥatim ‘Alī 殿の書状は届き、ここからその返事は送ったのだった。先方からその返事も届いたのである。Mir Mukaram Ḥusain 殿の手紙は一昨日届いたので、数日以内に返事を書くつもりである。我輩の様子は、相も変わらず、

吉報の喜びもなし、失望の恐れもなし

[貴殿の] 兄上の手紙は数日前に落掌、[兄上は] 我輩の返信を待っておられることだろう。一兩日中に書く気分になれば、兄上にも書くことにしよう。[1858年7月18日, GK: 278-279]

昨日正午頃に配達夫が来た。かの、手紙を配達する者である。来たと思えば蠟付布 (mom jāme) の小包 (parsel) を抱えて持って来た。先ずは pakiṭ [packet] が手紙の郵便で来たことに驚いた。さて、その書面を見れば、貴兄の書いた pamfleṭ [pamphlet] と2枚の切手がついている。しかしその先に黒い消印と、何やら英語が書かれてあるのだ。配達夫が言うところでは、1ルピー10アンナ支払えとのこと。支払って小包を受け取った。しかし不可思議な、これはいかなるごたごた (pec) なのだろうか。おそらくは、貴兄の小間使いが郵便局に行き、これを手紙の箱 baks [box] に入れたのであろう。郵便局員たち (kārparwāz) は気にも留めず、これを受取人払い (be-rang) の郵便として送ったようだ。[1858年7月28日, GK: 279]

驚嘆すべきは、Munshi Hargopāl 殿が我輩に手紙を書くのをなぜやめたのかということだ。もし我輩に怒っておるなら、それは何故か。もし町におらぬというなら、何処にいるのか。なぜいないのか。いつ戻るのか。どうかこのことについて我輩に教えていただきたい」[1858年9月3日, GK: 1052]

我輩より挨拶を伝えたまえ、そして新聞の包み (lifāfa-e akhbār) が届かぬことを報せよ。我輩宛の包みは無くなったためしはないのだ。はてさて、どこに紛れたものやら。おそらくは御仁が受取人払い (post paid) にて送ったものと思われるが、されば受取人払いがなぜ届かぬのであろうか。[1858年9月30日, GK: 297]

紙がなし。チケットもなし、前の封筒のうち、切手なき封筒があり。kitāb<sup>44)</sup> から紙を千切って貴兄にこの書状を書いておる。切手なき封筒に入れて送る。悲しむなかれ、昨夕、どこからか贈り物 (fatūḥ) が届いた。今日紙とチケットを注文することにしよう。[1859年11月8日, GK: 512-513]

臍を曲げ続けるつもりかや、いつかは機嫌を戻すのかや。もし何としても機嫌を戻すつもりがないなら、臍を曲げる理由を書かれよ。我輩は孤独の中、ただ手紙のみに頼って生きるなり。すなわち、ある人の手紙が届けば、その御仁がお出でになったものと考えてるのである。神のお陰で、どこかしらか、数通の手紙の来ない日はなし。否、二度ずつ郵便配達夫が手紙を持ち来る日もあるのだ。即ち、朝に1、2度、夕に1、2度。我輩は心を奪われてしまっている。手紙を読み、その返事を書いて一日が過ぎていくのだ。さて10、12日来、貴兄の手紙が届かぬというのはいかなる理由なのだ。これ即ち、貴兄が来な

44) 当時は紙不足で、書筒や封筒のために紙を再利用していた。本文には kitāb とあるが、印刷済みの kitāb の頁を再利用するのは困難と思われる。Dr. Tabassum Kāshmiri によると、書物の前後の白紙部分を書筒に利用した可能性もあるという。

いということなのである。手紙を書きたまえ、書かぬ理由を書きたまえ、半アンナをけちるなかれ。もしそうなら [郵便料をけちるなら], 受取人払いで送るべし。[1858 年 12 月 27 日, GK: 307]

このような話を好きにはなれぬ。1858 年の手紙の返事を 1859 年に送るとは。面白いのは、この話を貴兄に言えば、[手紙を受けた] 翌日に返事を出したと言うことであろう。愉快なのは、我輩も正しく、貴兄も正しいことである<sup>45)</sup>。[1859 年 1 月 3 日, GK: 308]

我輩は、貴兄の手紙が来て、その返事を書くのを待ち焦がれているのである。昨夕貴兄の手紙が届いたので、今朝返事を書きつけた。有名人に住所は必要なし。我輩は知られぬ身ではあるが、ペルシア語、英語の我輩宛の手紙は紛れることはない。時にペルシア語の手紙には住所に街区 (muḥalla) の記載なし。英語の手紙には住所など一切なく、町の名前のみがある。外国 (vilāyat)<sup>46)</sup> からの我輩宛の英語の手紙数通には、態々 Ballimārān kā Muḥalla とある。[1859 年 2 月 19 日, GK: 310]

兄弟よ、貴兄は旅人だ。何処にか行くのなら、何処に行くのか我輩に書きたまえ。もしくは、行く先々で手紙を書きたまえ。貴兄の手紙の届かぬことで、我輩は疑念を抱いてしまうのだ。我輩が疑念を抱くことを、貴兄はどうして好むのか。[1959 年 3 月 27 日, GK: 312]

一昨日 Kallū<sup>47)</sup> が [貴兄に郵便で届けるはずの] 靴を持ち帰ってきた。[包みの] 両方が開いたものを持って帰ったのだ。郵便局員 (kārpardāz) がでたらめ (ultā) をやっておいて、小包 (polinda) を作って来いと言ったのだ。それで polinda を作って持っていったら、2 時 12 分 (bāra par do bajē)<sup>48)</sup> に持って来いと言う。それで 2 時 12 分 (bāra par do bajē) に持って行って、ずっと座り続けていたら、夜 9 時になって彼の手元から [郵便物が] 発送された。受け取りを持って帰宅した。どうか君に届いて気に入って貰えます様に。[1859 年 12 月 16 日, GK: 680-681]

貴殿の書状を受け取った。[一度に書き溜めず] 別々に手紙を書きたまえ。書状をしたため、受取人払い (be-rang) か前納郵便 (post peḡ [paid]) のいずれか、思うままに小間使いに託し、郵便局 (ḡāk ghar) に送るがよい。[我輩の] 住まいの住所は要らぬ。郵便局は我が家の近くなり、郵便局長 (ḡāk munshi) は我輩の知人なのだ。貴殿はこうなされるがいい、今日明日のうちに玄関に行き、集まっている書状を受け取られよ<sup>49)</sup>。そして丈夫な紙の封筒に入れ、受取人払いで Kaliyān に託し、郵便局に送らせたまえ。手紙には町で起こりし新しき事を詳しく書かれよ。[1860 年 2 月 3 日, GK: 629]

50 年来デリーに住んでおる。数千通もの書状が至る所より届く。多くの人は [宛先に] 街区 (muḥalla) を記しておらぬ。多くは前 [に住んでいた] 街区の名を記すのだ。Ḥukkām の書状はペルシア語か英語で書かれておるが、イギリスより届くもの (vilāyat ke ā'e hu'e) は、ただ町の名と我が名を記

45) この書簡は、前の書簡 (12 月 27 日付) を受け取った Tafta が、年末に返信を送ったところ、年が明けて書簡が届いたということである。

46) この場合外国はイギリスを指す。ガーリブは詩句や *Dastanbū* などイギリス人に献上していたため、これの返答が届いたと思われる。

47) ガーリブの使用人 Kaliyān の愛称。

48) Bāra par do bajē (12 の上に 2 時) という表現は、Dr. Tabassum Kāshmirī も耳にしたことがないが、2 時 12 分という意味であろうとのこと。

49) 当時ガーリブは Rampur のパトロンの許に赴いており、手紙の受取人である Ḥakīm Ghulām Najaf Khān に留守を任せていた。

しておる。貴殿はこの〔事情の〕全てを知り、既に〔宛先に住所のない〕書状を目の当たりにしておられるのだ。なのに何故我輩に住所を尋ねるのだ。貴殿は、我輩が〔名の知れた〕裕福ではなく、職人 (ahl-e ḥarfa) にも非ず、街区と管区 (thāna) を書かねば、配達夫は我が住所を見つけ得ぬと思うておられるのであろう。しかし、貴殿がただデリーと書き、我が名を記せば、書状の届くことは我輩が保証する。[1861年4月4日, GK: 369]

我輩の書状が届かぬことを訴えるは間違いである、貴殿への返信を怠ったことがあろうか。[1864年5月18日, GK: 411]

そうそう、Rampur から戻り、*Durfish-e Kāvīyānī* 300冊を用意した。Nawwāb Mir Ghulām Bābā Khān 殿と手分けして、150冊の荷物を作る。包みの上に麻布 (ṭaṭ) をかけ、郵便局 (ḍāk ghar) に持ち込むと、〔受付を〕拒否された。郵便局員 (sarkārī ḍāk wāle) はこれを送るのを頑として受け付けず。Ṭheke wāle, pamfleṭ pakiṭ wāle [pamphlet packet wale], rel wāle [rail wale], 異口同音、これを送るのを拒否した。貴兄にはこの書状を ḥazrat に読ませていただきたい、そしてこの件に関し、〔ḥazrat が〕仰ることを我輩に書いてください。願わくば、何とかしてこの荷物をそこに届けたいのだ。この手紙の返事を成る丈早く書いてくれれば、我輩も有難く思う<sup>50)</sup>。[1866年1月23日, GK: 566]

かわらぬ世界、あの大地、あの空、あのスーラト、ボンベイ、あのデリー、あの Nawwāb Mir Ghulām Bābā Khān, あの Saif al-Ḥaq Saiyāḥ<sup>51)</sup>、あの死に損ないのガーリブ。イギリスの郵便は続き、配達夫 (harkāra) は列車に乗る……本日 Sha'bān 月の26日、朝8時にこの手紙を書いておる。8時になったところだ。今の時間までは貴兄の手紙も、Nawwāb 殿の書状も届いておらぬ。どうか我輩のこの手紙の返事を早く書かれよ、そして書状を書かぬ理由を書かれよ。本日、帽子 (ṭopi) 6つを小包 (parsel) にて発送する。どうか小包が届きますように、そして貴兄が帽子を気に入りますように……手紙は受取人払い (be-rang), 小包は peḍ (paid) なり。[1867年1月3日, GK: 569]

## 捜 査

宮城の使用人 (mulāzman-e qil'a) はさらなる仕打ち、捜査 (bāz-purs) や逮捕 (dārūghir) に追い込まれた。だがそれは皆、この騒乱 (hangām) を支持したり、加わった者なのである。我輩は貧しき詩人、十年来歴史執筆と詩句の添削にて関わってきた者。これを職 (naukarī) と思おうが、勤労 (maz-dūri) と思おうが、この騒乱 (fitna o āshob) には我は一切関せず。ただ詩作に仕えてきただけなのだ。己れを無実 (be-gunāhi) と思えばこそ、町より出でず。我輩がこの町に居ることを ḥukkām<sup>52)</sup> は知っておる。されど皇帝の daftar や間諜 (mukḥbir) の報告で、我輩にすることが何ら見つからなかったため、〔我輩に関する〕捜査 (ṭalbi) は無い。そうでなければ、多くの jāgirdār が呼ばれ、捕ま

50) *Durfish-e Kāvīyānī* は1865年に *Qat' Burhān* (初版は1862年, Nawal Kishor より出版) の第2版としてデリーから出版された。[Rām: 21; GK: 906] によると、*Durfish-e Kāvīyānī* の出版費として、Nawwāb Mir Ghulām Bābā Khān はガーリブに100ルピーの支援を行なった。100ルピーで300冊を出版し、これを150冊ずつ、Nawwāb とガーリブが分けることになったようである。しかし郵便局は、150冊分もの大きな荷物を受け付けなかった。

51) ジャーナリスト。ラーホールで活躍した。

52) イギリス人の為政者。

るこの頃であるから、我輩も一体どうなることやら。要するに我輩は自宅に居る、戸口より外に出ることではない。[乗り物に] 乗っていずこへと行くなど滅多になし。されば、誰かが我輩を訪ねるべきところであるが、この町で誰が来るであろうか。家という家は灯りの点ること無し。政治犯 (mujrim-e siy-āsāt) は捕まりつつある。軍の統治 (jarneli band-o-bast) は [大反乱の始まった 1857 年] 5 月 11 日より今日まで、即ち 1858 年 12 月 5 日まで続いておる。良しか悪しきかは我輩には判らず、このような問題 (amūr) には ḥukkām も関心を寄せず。さてこの先いかなることとなろうか。ここには外より許可証 (tikāt) 無しには何人たりとも行き来できず。貴兄もここに来ようなどと断じて思うなかれ。ムスリムの居住の許可が下るか否かを見届けるべし。[1857 年 12 月 5 日, GK: 267-268]

我輩の様子といえば、宮廷の文書 (daftar-e shāhī) に我が名の記されたものは見つからず、またいずれの間諜も我輩について何ら悪しき証言をしなかった。今の ḥukkām は我輩が町に在るのを知っておる。逃げもせず、隠れもせず。呼ばれもせず、逮捕 (dārūghīr) されず。いずれかの捜査 (bāz-purs) あるならば呼ばれることであろう。されど、[これまで] 呼ばれたことが無いように、自らもこの用事で出向いたためしはない。いずれの ḥākim にも会わず、いずれにも書状を書かず。何人にも面会を求めず。[1857 年] 5 月より年金を得ず。さてこの 9, 10 ヶ月をいかにして過ごそうか。この先どうなることやら全く見当がつかぬのだ。生きてはいるものの、生活は辛し。[1858 年 1 月, GK: 268-269]

ともかく、神に感謝すべきは、宮城の書類 (daftar-e shāhī) からは我輩が反乱に関わったことを示すものが見つからなかったこと。Ḥukkām によれば、我輩は年金を申請するほど [反乱の責任問題に関して] 清らかな身である由。我輩については話すも及ばず、関心とてなかりしことは皆の知るところである。[1858 年 3 月 12 日, GK: 272]

さて、我輩の痛みを聞いておくれ。逃げもせず、捕まりもせず。宮城の書類より我輩に関する書類は何ら出でこず。[イギリスに対する] いかなる裏切り (be-wafā'i) や謀反 (namak ḥarāmī) の汚点も我輩にはつかず。この地で Gorī Shankar 乃至 Gorī Diyāl, 若しくは誰か他の者が、反乱時に報告書 (akhbār) を送ったとのことである。そこに akhbār navīs<sup>53)</sup> がこのような記事を書いたのである、すなわち、某日、アサドゥッラー・ハーン・ガリーブが、この貨幣に載せる詩句 (sikka) を書いたと。

帝国の貨幣には金でこう刻まれた      スィラージ・アッディーン・バハードゥル・シャー二世  
ba-zar zad sikka-i kishwarstānī      Sirāj al-Dīn Bahādur Shāh Thānī

面会の折、コミッショナー殿 (Şāhib Kamishonar) が我輩にこう訊ねたのだった、「これは何を記しているのか」と。我輩は応えて、「間違えて記されております」と。皇帝も詩人、詩人の息子も詩人、詩人の使用人も詩人、[この中の] 誰かが記したのでございましょう。Akhbār navīs はわが名を記したというが、もし我輩が記したというのであれば、daftar から我輩自らが記したのが見つかる

53) Akhbār navīs の語は現代では新聞記者を意味するが、当時はイギリス政府が雇ったインド人間諜を指す。この制度については、Bayly 1996 を参照せよ。この書簡にあるように、ガリーブはバハードゥル・シャー二世帝の貨幣に貨幣用の詩句 sikka を書いたという間諜の報告を理由に、イギリス政府からムガル宮廷の支持者として疑われていた。この詩句はガリーブのものではなく、ガリーブの前にザファル帝の詩作の師匠だった Dhauq が、ザファル帝即位時に記した詩句であった。GK: 313 に、「我らは貴兄の akhbārnavīs なるぞ、貴兄に知らせてあげよう」というくだりがある。

べきであろう。[1859年6月18日, GK: 674-675]

### 宮殿の様

歴史<sup>54)</sup>の様子をお聞きになるか。やっと Humayūn の様子を書き終えたところだ。Akbar Bādshāh の状況など取り掛かってもおらぬ。[1851年9月9日, GK: 1105]

宮殿での仕事の様子を何と書き記そう。天国にお住まいの Shāh 'Ālam 帝の時代の頁 (kāghadh) など, Jeneral Lāḍ Lek [General Lord Lake] の請願書 ('arā'iz) と皇帝の命令書 (shuqqā) の写しばかり。それはともかく、残りの部分は皆、有名な諺にある通り、滅茶苦茶 (gā'o khwurd)。インド (Hindustān) で知られる本も役に立たず。国の統治機構 (band-o-bast), 州県の税制 (paragana bandī), 歳入 (jam'a bandī) をどう書けというのやら。Paṇḍit Šāhib [Abū al-Faḍl (1551-1602)] が *Ā'in-i Akbarī* を以って書かれたこと以上の記述は、どこにも見当たらないだろう。[1852年11月19日, GK: 1115-1116]

本日朝, 宮城 qila' には上らず。[1853年3月28日, GK: 252]

さて, 様子を聞きたまえ。[王朝史の] Humayūn の状況まで辿り着いたところである。[1853年4月10日, GK: 1123]

皇帝は城内で詩会 (mushā'ira) を設定された。毎月2回会が開催されることとなる。15日と29日である。(1853年4月23日, GK: 1124)

皇帝の様子を尋ねるのか。もし貴兄 (Haqir) が訊ねたら, 我輩は何と書けばよいのやら。下痢は収まったが, まだときどき起る。熱は下がっていくものの, 時折上がりもする。しゃっくりはそれほどひどくはなくなった。時々胸やけがしてげっぷがでるようだ。天蓋のない駕籠 (hawādār) を寝台 (palang) のそばにつけ, 閣下 (ḥaḡrat) を寝台から駕籠に移して座らせるのである。この方法でお出ましにもなられる。城内を廻られ, 宮殿に戻られる。病は去りつつあるが, 弱々しくなられたと思われるが良い。[1853年8月21日, GK: 1132]

宮城には [乗り物に] 乗って通っておる。[1854年12月31日, GK: 1158]

### 住 居

我輩は Kāle Šāhib<sup>55)</sup> の家 (makān) から越して来た。Ballimārān の muḥalla のある邸宅 (ḥavelī) を借り上げて住むこととしたのだ<sup>56)</sup>。前の地に住んだのは, 家賃が安かったためにあらず, ただ Kāle Šāhib の愛顧にて住んだのだ。貴君に報せるためここに記すことにしよう。我輩宛の書簡には家の目印

54) ガーリブが編纂に携わることとなったムガル王朝史 *Mihr-i Nim Rūz* (MN) のこと。未完のまま刊行された。

55) Kāle Khān。スーフィーで, ザファル帝の pīr として知られていた。

56) ムガル朝末期デリーの文人たちの状況を描いた小説 [Beg 1960: 15] には, ガーリブの住居の位置について以下のように記述している。「二軒目に訪れたのはアサド・アッラー・ハーン・ガーリブの許だった。チャンドニー・チョウクを抜けて Ballimārān に着いたあと, Ḥakim Maḥmūd Khān 師の屋敷の前から Qāsim Jān 横丁が始まるが, その左手の最初の家がガーリブのものだった。その家はマスジドの裏手にあっていた。

(nishān) を (記す) 要はなし<sup>57)</sup>, 「デリー市内 Asad Allāh 宛」で事足りる。だが「赤井戸 Lāl Kunwān」は書くべからず, 「Muḥalla Ballimārān」と書くべし。[1852 年 3 月 2 日, GK: 244]

貴兄並びに Bābu Ṣāhib はいかに心得ておられるのやら, 我輩宛の書簡の宛先に「Imli ke Muḥalle」と書かれておるではないか。我輩は Ballimārān に住んでおるのだぞ。Imli kā Muḥalla など, 大袈裟に言わずとも, この地から半コースは離れておる。配達夫ならいずれも我輩を知っておるのだから, [余計な住所を書いてしまうと] 書状は意味無く (市内を) 廻ることとなる。かつては Kāle Ṣāhib の家に住んでおったが, 今は Ballimārān にて邸宅を借りて (kirā'e ki ḥaveli) 住んでおる。Imli kā Muḥalla はいずこ, 我輩はここにあり。[1852 年 12 月, GK: 249]

我輩は故 Hākīm Muḥammad Khān の家に 9, 10 年間借にて住んでおる。ここは近所と言わず, 壁を隔てた家は医師 (ḥākīm) と使用人 (naukar) のものである。皆 Rāja Narindra Singh Bahādur Wālī-ye Paṭiāla に仕えておるのだ。Rāja はイギリス人殿 (ṣāhibān-e 'alī shān) と同意書 ('ahad) を交わしていたため, デリーでの叛乱時, この人々は助かったのだ。制圧後, Rāja の兵士 (sipāhi) がここに来たため, この通り (kūca) は守られたのだ。そうでなければ [今頃] 我輩はいずこに, この町やいずこにやあらん。[1857 年 12 月 5 日, GK: 267]

我輩は 10 年か 12 年 Hākīm Muḥammad Ḥasan Khān の邸宅に住んでおる。いまこの邸宅を Ghulām Allāh Khān が買い上げた。遂に 6 月には我輩に邸宅を出るよう命じた。どこかに 2 軒続きの邸宅がないものかと悩んでおった。もし見つければ, 一軒を女性用の部屋 (maḥal sarā) として, もう一軒を客間 (dīwān khāna) とするつもりだった。しかし見つからず, 詮方無く Ballimārān に家を探したが見つからず。貴殿の伯母上 (choṭī phūphi) がお助け下さり, Kaṛora<sup>58)</sup> の邸宅を我輩の住処に与えてくださった。Maḥal sarā の近くという条件は満たさぬものの, さほど遠くでもない。明日が明後日にはそこに移ることにする。[我輩は] 片足は地面に, もう一本は馬の鞍 (rakāb) にある<sup>59)</sup>。あの世に持っていく食事 (toshe)<sup>60)</sup> はこのさまで, この世の住み処 (goshe) はこのさま。[1860 年 7 月 8 日, GK: 367]

10, 11 年この方, この狭い所に住んでおる。[最初の] 7 年は毎月 4 ルピーを得ていた。今, [年金が再開され, 過去] 3 年分の金子として 100 ルピーを上回る [額] を一度に手渡された。家主は家売り払った。家を買った者は, 我輩に家を引き払えと, 伝えるどころか強く命じたのである。屋敷があれば我輩も立ち去るところだが。無慈悲なる輩は我輩を苦しめ, 無理に追い出した。邸宅の庭, 縦 2 ガズ, 横 10 ガズの中に板場があり, 夜はここで寝た。厳しい暑さに板場は [牢屋の] 板敷きに思え, 朝には我輩が死刑になるのではないかという思いが巡った。3 晩このように過ごし, 7 月 9 日月曜日の正午, ある屋敷が手に入って, そこに移った。命拾いした。この屋敷は前の家に比べると天国だ。さらによいことに, muḥalla は Ballimārān なのだ。もし我輩が他の街区に住もうとも, 配達夫 (qāsid) は書状

57) 現在でも南アジアでは書簡に宛先を書くときに, 番地ではなく, 宛先の周辺にある目印となる建物の名前を記すことがある。

58) この地区で知られた人物の名前と思われ, 建物を, その名前に因んで呼んでいた。

59) 死期が近い, 片足を墓に突っ込んで, という意味。

60) IU: 476 によると, tosha は旅人の食事を指し, 死人を埋葬するときに捧げる食事を指す。食事は埋葬後墓守に与える。

をそこに届けるであろう。即ち、もはやほとんどの書状はラール井戸の住所で届いておる。そして間違いないここに届くのだ。ともかく、貴兄はこのデリーの Ballimārān の街区と書くべし。[1860年7月28日, GK: 324]

## 年 金

年金についてはかくの如し。Koṭwāl より事情説明を求められた。それ〔調書〕には良い事が書かれた。昨日土曜日、8月7日に我を Ajerton 閣下 (ṣāhib bahādur) が呼びだした。易しい質問を我になさった。給金 (tankhā) が得られるような気配がしている、しかも早くに得られそうに思う。差し障りがあるとすれば、過去15ヶ月分も支払うべきか、あるいは今後の分が定められるかの点にのみあると見た。[1858年8月8日, GK: 494]

貴兄は年金を何故急いでおるのだ。毎度年金を訊ねておるではないか。我輩が、年金を受け取った後貴兄に知らせぬと思うておるのか。今はまだ何の命 (ḥukm) も来ておらぬ。いかなる命がいつ来ることか、ついぞわからぬ。[1858年10月7日, GK: 496]

若造よ、いずこをうろつきたるや。ここに来て話を聞きたまえ<sup>61)</sup>。Lāḍ Ṣāhib (Lord Sahib) の darbār がメーラトで催された。デリー地域の jāgīrdār はデリー・コミッショナー (kamishonar Dihli) の命ずるままメーラトに行きたり。古きしきたりに基づき会いて来たり。すなわち、12月29日午後、Lāḍ Ṣāhib がこの地に来たれり。カーブリー門の壁のふもとに陣を張りたり。大砲の音を聞くや、我輩は乗り物に乗りて出でぬ。秘書官長に会いぬ。その天幕に座りて、秘書に報させたり。返答あり、〔会う〕暇はなし、と。この返答を聞いて、絶望の重荷を背負いて戻り来る。年金について曖昧なる返事もなし。やや心配したる。さていかなるものやら。Lāḍ Ṣāhib は明日や明後日御立ちの由。ここで何がしかの言上や申し出は不可能なり。文書を郵便にて送るなり。さていかなることになるうや。[1860年1月1日, GK: 516-517]

Mirzā Tafta, ある不可解なる出来事をしたためたる、その出来事たるや、不可解千万であるが故、喜びに溢れるものとならん。我輩は年金支給につきイギリス政府には失望しおり。年金受給者のリスト (naqsha) がこの地で作られ、都 (ṣadr)<sup>62)</sup> に提出されたり。この地の ḥākīm は我輩に関し明確に書きたり、この人物は年金を受ける資格なし、と。政府はこの地の権威 (ḥākīm rā'e) に反対して我輩の年金の支給を命じたのである。その命がこの地に届き、知れ渡った。我輩も耳にした。今の話では、来月即ち5月1日に月給の支給が始まるそう。さて、これまでの金子についていかなる決定になるのだろうか。[1860年4月16日, GK: 322]

我の話を書きたまえ。年金はそっくりそのまま (be-kam o kāst) 支給された。3年分の金額が一度に得られたのだ。Ḥuqūq<sup>63)</sup> の支払い後、さらに400ルピーを出さねばならず、78ルピー11アーナが手元に残った。5月分は規則通り与えられた。6月に命が下り、年金受給者は、定期的に6ヶ月毎に得られるものとし、月毎に年金を分割するものではない、とのこと。[1860年7月8日, GK: 367]

61) Majrūḥ 宛の書簡。Majrūḥ は大反乱直後にデリーを離れ、Panipat に移住した。

62) カルカッタ。

63) 税金など何らかの支払い義務の一種と思われる。

さて我輩の話を書きたまえ。遂に 6 月、パンジャブの知事 (şadr) より命が下った。年金受給者は毎月受給されず、年に 2 度、6 ヶ月毎に、季節毎に受けることとなる。慈悲無き金貸し (sahūkār) より利子を取られたのち金を受け取る。Rampur の [nawwāb からの援助] 収入に合わせて使うこととしよう。利子は 6 ヶ月間等しく払い続けねばならず、適当額が差し引かれることとなる。

6 月に 1 度とは死人の生活のごとし かかる歩みで 生きねばならぬとは  
とわに囚われの我を見よ 年に 2 度 6 月に 1 度とは [1860 年 7 月 28 日, GK: 323]

## 表 現

貴兄の書状、郵便にて届いた。昨日昼過ぎ、見知らぬ御仁が、魅力的な浅黒い肌、髭を剃り、大きな瞳をして参られた。貴兄の書状を渡した。我輩はこの御仁に会う機会を得たので、芳名 (ism-e sharif) を尋ねると、こう申された。アシュラフ・アリーと。qawmiyat を問えばサイド (saiyid) と判る。生業を尋ねれば、医師 (ḥakim) と判明した。即ち、ハキーム・ミール・アシュラフ・アリーである。我輩はこの御仁に会ってまことに嬉しくなった。良き人間である、また有能なる人物 (kām ke ādmī) である。[1858 年 4 月 21 日, GK: 492-493]

我輩の様を書きたまえ、be-rizq 生きる術を覚えたのだ……ラマザン月は断食を食べ続けて過ぎした。今度は神が rizq である。もうこれ以上食べるのがなくとも、哀しみ (gham) はある。ああ大兄 (Mīr Mehdī Majrūh) よ、もし食べるものが一つでも手に入るのなら、たとえそれが悲しみでも、何が哀しいものか。Mīr Sarfarāz Ḥusain に我輩の代りに肩を抱いて挨拶しておくれ。Mīr Naṣīr al-Dīn に宜しく伝えておくれ、Shafi' Aḥmad 殿に、Mīr Aḥmad 'Alī 殿にもよろしく。Mīrān 殿には挨拶はしなくていい。この手紙を読んで聞かせておくれ、そしてここに來させておくれ。[1858 年 4 月, GK: 493-494]

我輩を見よ、自由の身にもなければ、囚われの身にも非ず、病身にもなければ、健康にも非ず、嬉しくもなければ、嬉しくなくもなし。死んでもおらず、生きてもおらず。行き続けるのみ、ローティー (rotī) を毎日食べるのみ、酒 (sharāb) は時々飲んでおる。もし死が訪れば、死ぬるのみ。有難くもなし、不満もなし。ただ運命のあるままに、導くままに。何処に住もうと、いかに住もうと、週に一度は手紙を書きなされ。[1858 年 12 月 19 日, GK: 306-307]

おお友よ、saiyid の子よ、自由なる者、デリーを愛する者よ、凋落した Urdū Bāzār に住む者にてラクナウを悪く言う者、心には慈愛などなく、目には恥じらいもなし、Nizām al-Dīn Mamnūn<sup>64)</sup> よいずこ、Dhauq<sup>65)</sup> よいずこ、Mūmin Khān<sup>66)</sup> よいずこ、一人残りしアズルダ Āzurda<sup>67)</sup> は沈黙してしまい、残る一人のガーリブは酩酊にある。詩はなく、詩作もなし、では何故に [デリーの人は]

64) Nizām al-Dīn Mamnūn (d. 1844)。アクバル・アリーシャー 2 世に仕えた宮廷詩人。

65) Shaikh Ibrāhīm Dhauq (1789-1854)。ガーリブの前にバハードゥル・シャー 2 世の詩作の師匠 ustād だった詩人。デリー生まれで、ザファルの師匠には 1810 年頃に就任していた。

66) Ḥakīm Mūmin Khān Mūmin (1800-1851)。ガーリブの友人で詩人。

67) Muftī Ṣadr al-Dīn Khān Āzurda。ガーリブの詩人で学者、詩人。イスラーム法学の学院を主催していたが、大反乱後イギリス軍に身柄を拘束された。その後釈放されたが、没収されていた彼の土地の半分はイギリスに買取された。

驕っておるのだ、ああでリーよ、ああでリーよ、呪わしきでリーよ。[1861年5月23日, GK: 525]

紙面が尽きた、さもなくば貴兄の心を喜ばせるためにさらに書いたものを。[1861年9月22日, GK: 533]

inkam ṭaks も別 [に払わねばならない], 門番 (caukidār) [への支払い] も別, 利子 (sūd) も別, [借金の] 元金 (maul) も別, 妻 [への支出] も別, 子供 [への支出] も別, 弟子 [の支出] も別, 収入といえばあの 162 [ルピー]。困ったものだ。やりくりも難しい様である<sup>68)</sup> [1862年6月27日, GK: 396]

我輩は大変な困難にある。Maḥal-sarā の壁が崩れ落ちてしまった。便所が崩れ落ちたのだ<sup>69)</sup>。屋根は揺れておる。貴殿の叔母 (phūphī) はこう嘆く、ああ, [屋根に] 押し潰される, ああ, もう死んでしまう, と。客間 (dīwān khāna) の様は女性の部屋 (maḥal-sarā) より悪しき状態である。我輩は死を恐れぬ。愉しみのない (fuqdān-e rāḥat) のが怖いのだ。屋根は笊 (chalnī) [のように穴だらけ]。雨雲が 2 時間雨を降らせれば, 屋根は 4 時間降り続く。[1862年6月27日, GK: 398]

子供 (laṛkā) は恐れず, 妻も慌てず。我輩も不安はなし。開けた屋敷, 月明かりの夜, 風冷たく, 一晚中空には火星 (marīkh) が見える。2 ガリー (do gharī)<sup>70)</sup> の後, 金星 (zohra) が見える。こちらでは月が西に沈み, あちらでは東に金星。明け方の酒 (subūhī) のあの趣, 光のあの世界。[1862年8月6日, GK: 400]

神は御仁 [Nawal Kishor] に金星 (zohra) の姿を与え, 木星 (mushtari) の人格 (sirat) を与えた。それはまるで吉祥の星が同じ天宮にある (qīrān al-Ṣa'idin) がごとし。[1863年12月3日, GK: 407]

記したるは貴殿も知るガーリーブなり<sup>71)</sup> [1865年12月6日, GK: 420]

## 食事, 酒, タバコ

日差しはとても強い。断食はするが, 断食を癒しつつづけておる。時に水を飲むし, 時にフッカ (ḥuqqa) を飲む。時に roṭī の欠片を食べたりする。この人々は誤解しておられる。我輩は断食を癒しておるのに, その御仁は, お前 [ガーリーブ] が断食をしていないと云う。断食をしないことと, 断食を癒すのは別のことだご存知ないのだ。[1853年6月22日, GK: 1130]

嘔吐 (qae) と下痢 (dast ana) とは, 貴兄 [Munshi Shiv Nārāyan Ārām] は質の悪い酒を多く飲んだものと思われる。身体を冷まして (tadbīr karnā)<sup>72)</sup> 酒を飲み過ぎぬように。[1858年12月18日, GK: 1067]

リキュール (likyūr) の意味を貴兄は知らぬらん。イギリス酒 (Angrezi sharāb) なり。原酒 (qiwām) これ極めて繊細, 色見事に美しく, 味も水砂糖 (qand) の薄いシロップ (qiwām putla)

68) ガーリーブはこれ以外にも Rampur の nawwāb から毎月 100 ルピーを得ており, 当時としては破格の収入であったことは間違いない。問題は借金の額がどの程度あったかであろう。

69) 便所は屋上に設えてあった。

70) Gharī は時間の単位 [近藤治 1999: 155-156]。

71) 書簡の結語。

72) Tadbīr karnā には, 身体を冷ます, という意味の他に, 二日酔いで火照った身体を冷ます薬を飲むことも指す。

の如く甘きなり。この言葉の意味はいずれの字引 (farhang) にも見出せぬべし。さては *Farhang-e Sarwari* にあるやも知れず。[1859 年 7 月, GK: 511]

食事は 2 度とも sarkār から届き、皆に十分な量である。食事は我輩の好みに反してはいない。水への感謝はいかにすればよいものか。Kosi という川があって、[その水は] なんとも甘いので、飲んだ者は、これが薄味の sharbat ではないかと疑ってしまうほどなのだ。軽やかで快適、消化も良く、腹の具合も良い。この 8 日間、便秘 (qabz) や消化不良の悲劇から守られておる。朝には大変腹がすく。[1860 年 2 月 3 日, GK: 631]

12 時だった。我輩は裸でベッド (palang) に寝転がって水煙管 (ḥuqqa) を飲んでしたが、男 (ādmi) が来て手紙をよこした。手紙を開け、拝読。運の良い事に、コート (angarkha) もクルター (kurtā) も首元になかった。さもなくば、我輩は胸元 (gurebān) を引き裂いていたところ、貴兄に損はなし、我輩が損するのみ。[1860 年, GK: 988]

4 日来風が吹く。雲は来るものの、ぱらつく小雨のみ。ひと月雨なし。小麦、ヒヨコ豆、バージラ (bājira) の 3 穀物は同じ値段なり。9 セール (ser), 9 セール半なり。[1861 年 1 月 9 日, GK: 522]

風冷たく、水も冷たし。大収穫となり、穀物は多く実った。[1861 年 10 月 15 日, GK: 378]

去勢山羊 (khaṣṣī bakra) の肉のカレー (qaliya), dū piyāza, pulā'o, kabāb, 貴兄の食せるものなら何とでも、若し心に浮かぶなら我輩にも。Bikaner の氷砂糖 (miṣri) が貴兄の元に届きませんように。Mir Jān が氷砂糖の粒を嘗める様を思い描けば、我輩は嫉妬に臍を噛む (kaliya cubānā)。[1861 年 10 月 15 日, GK: 379]

本日、食事をしようと家に向かおうとした折、Shahāb al-Dīn Khān が貴兄の書状と氷砂糖の小さな土の甕 (ṭhaliyā) を持って来た。我輩はそれを手に家に向かった。眼前で氷砂糖を量らせれば、2 セールと半パーオもあった。富者の館なり。これは十分である。最早要るもの (ḥājat) などなし。食事を済ませて外に出でれば貴兄の甥 (ibn-e 'um), 書状の返答を待っておったが、駱駝に乗って (shatr sawār) 出掛けるところだった。我輩は食後寝転がる習慣にて、横になりながら氷砂糖の受領を書きしたためた。[1861 年 11 月 12 日, GK: 379]

ああ、あれは nawwāb 殿に冗談で書いたことなのだ。友人として書いたまでのこと。我輩が、つんばで歌など聞けぬこと、老齢で踊りなど見るべくもないこと、食事といえば 6 粒 [ほんの僅か] の (māsh) 豆とふすま粉 [のパン] (āṭā), 何を食べるというのか、ボンベイやスラトでは良いイギリスの酒 (Angrezi sharāb) がある由、もしそこに行くことができれば、宴に参じて飲んだものを。[1866 年 9 月 5 日, GK: 568]

### 病気・晩年

我輩のまことの様子を聞いておくれ。ひと月以上の間、左足に腫れ (varm) がある。[これが] 足の裏 (kaf-e pā) から足の甲 (ousht-e pā) を覆い、ふくらはぎ (pandli) まで腫れる (āmās)。立ち上がればふくらはぎの血管 (rugen) が裂ける [ばかりの痛さ] なり。左様、起きる事もなく、食事をしに女性の部屋 (maḥal-sarā) にも行かず。食事はここに運ばせておる。小便にも立てず。尿瓶 (hājti) を置いている。しゃがんで座るのがやっこさ。便所に翌日か 2 日後に立とうとするが、それもまた出来ぬ有様。[1863 年 7 月 3 日, GK: 406]

我輩は生きておる。[この手紙の] 先に自らを死んだと書きしたためたが、それは詩の添削が出来なくなったということだ。それを除けば生きておる、死んではおらぬ、病でもなし。ただ老いて力なく、金も無く、借金を重ね、耳は聞こえず、運命は不運なまま、生きるのに飽き、死を願うばかりである。[1867年, GK: 356]

生きるには僅かの愉しみ (rāḥat) が必要だ。その他のḥikmat, 帝国 (saltanat), 詩, saḥari など皆たわけ事 (kharāfat) である。ヒンドゥーで生まれ変わったとして何になろう, ムスリムで預言者 (nabi) になれたとして何になろう。この世で名を馳せたとして何になろう, 名も無く生きたとして何になろう。生活の糧と健康さえあれば, あとは絵空事 (waham)。[1867年以降, GK: 357]

衰弱 (zo'f) はゆっくりと訪れるもの。それより, これを衰弱と呼ぶ力 (qavi) はどこにあったのだろうか。ある老人が, とある路地 (galī) を歩くうち躓いて転んで曰く, 「ああ, 老いよ」。あちこちを見渡して, 周りに誰もいないと気づくと, さらにこう言いながら進んでいった, 「若いときなど [投げられる] 石もものにしなかったのに<sup>73)</sup>」[1865年1月, GK: 416]

丸ひと月髭をあたらず。[1866年1月, GK: 668]

写真の様子という, 写真家殿は我輩の友人だが, 我輩の顔写真を撮って行ってしまった。あれから3ヶ月も過ぎようというもの, 今日まで全身 (badan) の写真を撮っておらぬ。我輩は鏡で写真 (naqsha) を撮らせることも認めたというのに, ある友人がそういう仕事をやってはいるものの, イードの日に来た折, 我輩は彼に全身 (shabih) を撮って欲しいと云うたのだった。すると明日ではなく明後日に, 撮影道具を持って来ると約束したものの, Shawwāl, Dhū al-Qa'da, Dhū al-Hijja, Muḥarram, Ṣafar と, 5ヶ月目に入ったが, 今日まで来ないのだ。[1867年6月11日, GK: 573]

老いて, 不具の身 (apāhaj), 完全につんば, 半めくら, 昼も夜も寝転がったまま。尿瓶は寝台 (palang) の下に置いてある。おまる (tasht coki)<sup>74)</sup> は寝台の側に据えたまま。簡易便器に3, 4日毎に行くこととなる。頻尿 (sur'at-e bol) のために尿瓶を欲し, 一時間に5, 6回立たねばならぬ。写真家にインド人 (Hindustāni) の友人がいたが, 町 (shahr) から出て行った。イギリス人が一人おり, これが撮るといふ。[階上の] 屋敷から降りて籠 (pālki) に乗り, 彼の家を訪ねて1, 2時間もイスに座り, 写真を撮らせ, 生きたまま家路につくなど, そんな力がどこにあらうか<sup>75)</sup>。[1867年8月25日, GK: 574-575]

我ここに署名を以って貴兄 (Tafta) に記す, ウルドゥー文学 (fan-e Urdū) において韻文, 散文いづれにおいても貴兄が我が後継者である。我輩の知る者が我を知るがごとく, 貴殿を知るであろう。また我輩を認めるがごとく, 貴殿を認めるであろう。[1968年6月21日, GK: 427]

73) ペルシア文学『ライラーとマジヌーン』に見られる, 恋に狂った主人公が石を投げられる話に因んだもの。血気盛んな頃は, たとえ石を投げられてもこれに耐えられたというのに, 老いた今では石に躓いて不平を述べている, と悲嘆している。

74) 丸椅子の形状をした木製の簡易便器。Dr. Tabassum Kāshmiriによると, 1960年代まではカシミールなど山岳部ではホテルなどでもこれを用いていたという。

75) ガーリの最も有名な写真がこの書簡に記されているものである。

## IV 考 察

## 1 デリーの復興

大反乱になると、デリーの住民の多くは各地に脱出した。Gupta: 45-48によると、1846年のセンサスでは Shāhjahānābād には 25,000 軒の家屋があり、そのうち 18,000 軒が “pucca houses”<sup>76)</sup>で、1853年には 38,000 軒にまで増加していた。ところが 1881年のセンサスでは “pucca houses” は 17,498 軒にとどまったという。すなわち、大反乱時の人口減少と、その後のイギリスによる区画整理によって、約 2 万軒の家屋が取り壊されたことになる。

大反乱当時デリーの commissioner 夫人だった Mrs. Sandres は、「[デリーの] 町の民家は悉く空家で、その多くが取り壊された。住人達は 7 マイル以上も離れたところに散らばってしまっていた」[Ikram: 156] と記している。治安は悪化し、強盗たちは心置きなく留守宅に侵入し、略奪の限りを尽くした。彼らは prize agents という公式名 (sarkārū nām) を与えられていた。略奪品は兵士たちと山分けしたり、知人と分配したりしたという [Ikram: 155-156]。

このようにデリーの市壁に囲まれた Shāhjahānābād 内の治安が悪化したため、旧住民以外の出入りが制限された。1857年12月5日付の書簡にあるように、日中外部より市壁内部に入るには許可証 (ṭikat) を入手しなければならず、夜間同地域内に留まる事は禁じられた。1859年2月の書簡 [GK: 504] にあるように、許可証にはペルシア語が記されていた。許可証を携帯しているかどうかについては、1859年2月2日付の書簡では、Shāhjahānābād に入る門の入口には巡査が莫蔭を敷いて検問を作って往來を監視しており、もし白人の目を盗んで Shāhjahānābād 内に入ろうとして発見されると、5回の鞭打ちか 2 ルピーの罰金、あるいは 8 日間の入牢が科せられたと書いている [GK: 501-502]。同じ書簡から、この時期 Shāhjahānābād の住人のリスト (naqsha) が作成されることとなり、巡査が一軒一軒調査に出ていることが判る。

また Shāhjahānābād での居住に関しては、1858年12月22日付の書簡において、同地の人々の間では、1859年初めには人々が戻ってくるという噂が流れていた [GK: 500-501]。このことはすなわち、1858年末の時点ではデリーを去った人々は戻ってきていなかったということになる。1859年6月18日付の書簡では、ラーホーリー門の地区にある百軒ほどの家屋に人が住み、数千戸の bastī となり、今後市内にも人々が戻るであろうとの観測を述べている [GK: 674]。すなわち、デリーの市壁入口近郊に人々が戻りだしたのは 1859年前半期であろう。GK: 774 にある通り、Shāhjahānābād の居住許可証の制度は、1859年8月19

76) pakkā: 泥作りでない、柱と屋根のある家屋。

日の書簡で廃止されたことがわかり、また 1859 年 11 月 9 日付の書簡にあるように、自宅を所有していた者は居住を許可された。間借りしていた者には居住の許可が下りていなかったが、「一昨日」、すなわち、11 月 7 日には間借りでも居住を許可することが発表された。これにより、デリー市内には人々の波が押し寄せてきたとある [GK: 679]。しかし、1859 年 12 月 2 日の書簡では、デリーの名物としての宮城、チャーンドニー・チョウク、ジャーマ・マスジドの集い、ジャムナー川の橋の憩い、毎年「花祭り」を挙げながら、これらすべてが最早ない [GK: 514-515]、と述べており、1859 年 11 月頃に人々が Shāhjahānābād に戻りだしたのは間違いないが、元の活気を取り戻すには今しばらく時間を要したというところであろう。

1860 年 1 月 19 日から、ガーリブはパトロンの Nawwāb Yūsuf ‘Ali Khān<sup>77)</sup>に会うために Rampur を訊ねたほか、Muradnagar, Merath, Muradabad 等を旅し [GK: 629]、同月 27 日に戻った後、3 月 17 日から 24 日まで再度 Rampur を訪問している<sup>78)</sup>ことから、1860 年初めには Shāhjahānābād への住民の回帰も本格化し、住人の外出も自由になったと思われる。ただし、[Gupta 1981: 70] にあるように、ジャーマ・マスジドへの一般市民の入場は 1862 年まで禁じられていた。1864 年 10, 11 月頃の書簡 [GK: 659] では、先述の「花祭り」のためにデリー中の市民が出払ったとあることから、1860 年から 64 年の間に、デリーには元の活気が戻ったといえる<sup>79)</sup>。

なお、1859 年 11 月 8 日付書簡にあるように、同年 11 月 7 日に入市税 Town Duty が施行された。Town Duty に関しては、1824 年に既に Town Duties Committee が設立されていたが、Imperial Gazetteer of India 1909: 291 の記述どおり、ムガル朝時代より chungī において入市税の徴収が一般的になっており、町を出入りする人や物に課せられていた。

## 2 デリーの区画整理

ガーリブは大反乱前後の時期、デリーの市壁に囲まれた Shāhjahānābād 内に住んでいた。この地域は、かつて泥でできた壁に囲まれていたが、Shāhjahān 帝の時代に改築され、完成した [Noe: 243]。Ikrām: 156 によると、大反乱以前、デリー城とジャーマ・マスジドの間には高層の家並みがあり、Shāhjahān 帝時代より umrā やその家族たちが住んでいたが、大反乱後、これらの建物を取り壊すという命が下り、さらに、Khāṣ Bāzār, Urdū Bāzār,

77) Yūsuf ‘Ali Khān は 1857 年 2 月 5 日にガーリブの弟子になったが、パトロンとして、ガーリブが金策に困窮していた 1859 年 7 月に毎月 100 ルピーを援助することを決定した。

78) Rām 1977: 19.

79) Dihlavi 1919: 558 には、花祭が大反乱以降その規模を小さくしたとあるが、これは、Dihlavi が 1919 年に執筆したことを考えると、ガーリブの書簡にある 1864 年の賑わいに至るまでの様子を述べたというより、むしろ、花祭の賑わいが復活したものの、それでも大反乱以前の往時には及ばないという意味であろう。

Khānam Bāzār という有名なバーザールが拡大されたため、どこまでがバーザールであったか判らなくなったという。

Gupta 1981: 70-71; Noe 1986: 244-5; Gupta: 39; Jain 1994: 83-88 にあるように、大反乱以前より、東インド会社は領内の区画整理を実施してきたが、大反乱制圧後には、軍営 cantonment 設営や射撃場整備のため、大規模な工事を行なった。Jain 1994: 83-88 によると、デリー城とジャーマ・マスジドを駐屯地としたイギリスは、当初、デリー城を含む Shāhjahānābād 全てを爆破する計画を立てていたという。城跡に Victoria 城を、ジャーマ・マスジド跡に聖堂を建てる計画だったが、国務大臣によって中止された。

市壁の撤去工事は 1858 年初めに始まったが、10 ヶ月後に中断された。その後 1859 年、Shāhjahānābād の統治が民政移管され、デリーがパンジャブ州に編入されると、いくつかの道路が拡幅、敷設された。同年、城から半径 500 ヤード地域の建物を完全撤去する命令が下された。Noe 1986: 244 には、整理工事が 1860 年に始まったとあるが、これは Jain のいう最初の工事中断後の工事再開を指すと思われる。この工事は、デリー城内の 80% の部分や、城に隣接する Shāhjahānābād の西と南の周囲半径 300 ~ 400 ヤードの範囲を更地にすることから始まった。Shāhjahānābād の建造物の取り壊し範囲は、防御用の目的と砲撃範囲から決定されたが、これにより「由緒ある muḥalla や bāzār、市内で最も大きなモスクの一つや慈善施設などが撤去された」[Noe: 244]。

上述のような記録が残る中、ガーリブの書簡ではどのような記述が見られるだろうか。

ガーリブの書簡中、Shāhjahānābād の建物の取り壊し作業に関する言及は 1858 年 12 月 22 日 [GK: 500-501] 頃に見られる。この書簡は、彼の住んでいた Ballimārān 街区の入口脇の店数軒が壊されて道路が拡張されたとある。

デリーの建造物の名前が最も多く出ているのが 1859 年 7 月 28 日付の書簡 [GK: 771-772] と、1860 年の書簡 [GK: 524] である。前者では、デリー城の前の地区が取り壊され、更地になるとの計画を知ったガーリブがこれを悲しんでいる表現が見られる。そして後者では、ガーリブが乗り物でデリー市内を廻ると、ほとんどの場所が跡形もなくなってしまった様子が窺える<sup>80)</sup>。

1859 年 7 月 28 日 [GK: 771-772] 頃、Āghā Bāqir の Imāmbāra が取り壊され、並木道 (ṭhandī saṛak) と鉄道 (āhni saṛak) が敷かれると記してある。

Gupta: 42 によると、デリーの鉄道敷設について、1852 年頃にはパンジャブとカルカタを結ぶ計画がまともっていた。だが大反乱後、Indian Government の方から、鉄道はデリーではなくメーラトを経由するようにと進言した。今後は軍事的、政治的目的ではなく、

80) Aḥmad 1919: 594 には、カーブリー門界限に関し、門を除いては昔日のデリーの面影は残っていない、とある。

経済面を重視して、デリーに鉄道を引く必要はないという主張であった。だがその後、Punjab Railway Companyなどがデリーへの鉄道敷設を主張し、1863年、デリーに鉄道を敷くことが決定され、1866年12月31日にデリーで初めて汽笛が鳴ったという。

ガーリブは、前述1859年7月の書簡で鉄道敷設を述べた時は、デリーの建造物が壊されることを嘆いていたが、その後1861年1月9日[GK: 522]では鉄道敷設が延期状態にあると書き、9月22日[GK: 533]には、鉄道が敷かれないうままに、デリーの復興が遅れていることを示唆している。ガーリブにとって、鉄道の敷設は、当初はデリーの面影が変貌することを嘆く材料になっていたが、その後Shāhjahānābādの様相が一変し、イギリス統治が本格化すると、むしろ壊滅状態のデリーの復興の象徴に思えたのであろう。

1859年7月28日の書簡[GK: 771-772]ではJān Nithār Khānの家の取り壊しが始まっているが、同年11月8日[GK: 512-513]の時点で、ジャーマ・マスジド周辺の取り壊し工事はまだ始まっていない。同書簡で取り壊されると書かれた「永遠の館 dār al-Baqā」とは、Shāhjahānābād内のマドラサ(madrasa)の名前である。Hairat 1903: 344に、「1857年より前、ジャーマ・マスジドの西の三角地帯に、1軒の病院 dār al-Shifāと madrasa dār al-Baqāがあり、大反乱前、dār al-BaqāではMufti Ṣadr al-Dīn殿が教えておられ、madrasaの修復もこの方がなされた」とある。だがこの有名なmadrasaも、「ただアッラーの名のみ残るなり」[GK: 513]とガーリブが嘆く通り、その後の取り壊し作業で姿を消した。1860年1月1日付の書簡[GK: 516-517]には、前年12月29日にLāq Ṣāhib一行がカーブリー門の市壁の下に天幕を張ったとあることから、この時点で天幕を張って式典を開催できる土地を確保していたことになる。1月9日[GK: 522]では、Kashmīrī Kaṭraがほぼ壊滅状態にあり、屋敷はほとんど姿を消して、舗装道路になったと書いている。Noe: 244で指摘している、撤去された「最も大きなモスクの一つ」とは、この書簡の言及と、Dehli: Plan of the Cityから推定するに、ラーホーリー門の南西のKashmīrī Kaṭraに位置していたKashmīrī Kaṭra Masjidと思われる。

1860年6月11日[GK: 547]頃に取り壊し工事が本格化し、8月24日[GK: 993-994]には鶴嘴や爆薬などによってデリー城や市内の建物がほぼ壊され、9月[GK: 607]には、住人達が、住居を特定できないほど破壊が進んでいた。他方1861年9月22日の書簡では、「町は静まり返り、どこにも鶴嘴の音は響かず」[GK: 533]、建設の兆しがまったくない様子を記している。

これらの言及を総合すると、1858年1月に始まったShāhjahānābādの市壁撤去と区画整理作業に伴う建造物の取り壊し作業は10ヵ月後にいったん中断されたが、その後再開され、1859年末頃にはある程度の取り壊し作業を終え、8月頃にはほぼ終了していたと考えられる。その後約1年半、取り壊した地区は更地の状態にあった。

### 3 書簡に現れた地名や建造物について

ガーリブの書簡に見られる建造物の特定については、大英図書館所蔵のウルドゥー語によるデリー市街地図 *Delhi: Plan of the City* が最も詳しい<sup>81)</sup>。*Delhi: Plan of the City* で判明したのは、ガーリブの住んでいた *Muḥalla Ballīmārān*, *Imāmbāra*, ラール貯水池 (*Cashma Lāl Ḍiggī*), 象舎 (*Fil Khāna*), *Bulāqī Begam* の *kūca*, *Khāṣ Bāzār*, チャンドニー・チョウク (*Candni Cauk*), *Shāh Bolā* のバニヤン樹, パンジャービー横丁 *Muḥalla Panjābī*, ドービー長屋 (*Kaṭra Dhobī Wāra*), ミール・ハイラーティー邸 (*Ḥaveli Mīr Khairātī*), ラーム・ジー・ガンジ (*Rām Jī Ganj*), *Shāh Bolā* のバニヤン樹, *Bholo Shāh* の墓所 (*qabr*) である<sup>82)</sup>。

*Imāmbāra* は *Shāhjahānābād* に数多く存在し, *Āghā Bāqir* の *Imāmbāra* がどれであるかは不明である。*Cashma Lāl Ḍiggī* については, *Mihr* 1969: 380 に, 以下の記述が見られる。「*Lāl Ḍiggī kā Tālāb* は, デリー城・ラーホーリー門の南側城壁の傍らにあった貯水池で, 1845年にイギリスが造営した。赤砂岩でできた縦500フィート, 横150フィートの大きさで, 四隅には小さな塔が立っていた。デリーの繁華街, チャンドニー・チョウク地区の水源となる水路につながっていたが, 1857年のインド大反乱で壊滅し, その後跡形も無くなってしまった」。 *Khān* (II): 273 には *Lāl Ḍiggī* の絵が掲載されており, デリー城のすぐ脇で, そばにラーホーリー門も描かれている<sup>83)</sup>。

象舎 (*Fil Khāna*) も, *Delhi: Plan of the City* では *Shāhjahānābād* 内に3ヶ所確認できる。うち2箇所はデリー城のそばにあるが, ガーリブが指しているのは, デリー城のデリー門の外, *Khāṣ Bāzār* 沿いにあった *Fil Khāna Bādshāh* であろう。ジャーマ・マスジドとデリー城の間に位置しており, 区画整理の対象になったのだった。*Bulāqī Begam* の *kūca* もまた, *Fil Khāna* の近く, ジャーマ・マスジドとデリー城の間に位置していた。*Khāṣ Bāzār* はデリー城のデリー門からジャーマ・マスジドに伸びる一本道である。

81) 大英図書館所蔵にかかる19世紀のデリーの地図には, 1808年の *Trigonometrical Survey of the Environs of Delhy or Shah Jehanabad 1808* (IOR/X/1658) と, *Dehli: Plan of the City 1850: A Native Map with Names in the Vernacular Character* (IOR/X/1659), 1857年10月にカルカッタから刊行された *The Fort & Cantonment of Dehli* (IOR/X/1661), 1857年にロンドンで刊行された *Dehli 1857* (IOR/X/1663) 等がある。*Shah Jehanabad* はデリー郊外をも含む大判のもので, デリーの市壁内部の状況については詳しくない。*Dehli: Plan of the City* は, 41インチ×45インチの大きな地図で, *Eckart Ehlers & Thomas Krafft 1993* の付録として, ウルドゥー語の記載内容をローマ字表記にして復刊されたが, 後者には, 前者の地名や建造物名が省略されたところもある一方, 前者にない地名も記載されている。

82) *Dehli: Plan of the City* には, ガーリブの自宅のあった *Ballīmārān* 街区の近くに, 「令夫人の屋敷 (*Koṭhī Begam*)」という建造物名が記されている。だがこれが, 書簡にある *Jarneli Begam ki Ḥaveli* と同一のものかは不明である。

83) なお, *Dayal 1975* には, *Lāl Ḍaggī* と記されている。

ラーム・ジー・ガンジ (Rām Ji Ganj) は Delhi: Plan of the City における、カーブリー門脇にある Rām Ji Mal のことと思われる。

Shāh Bola のバニヤン樹はジャーマ・マスジドの qibla の方向に伸びる広い道路 Bāzār Cā'urī の先約 150 メートルに位置するやや広めの空間にあった。

Muḥalla Panjābī と Kaṭra Dhobi Wāra は, Shāhjahānābād 北西に位置する街区だった。前者については, Panjābī の居住区が相当大きかったようで, Delhi: Plan of the City には, Muḥalla Panjābī 界限には, Masjid Panjābī, Kaṭra Panjābī などの建造物や地名が見られる。他方, 後者については, 洗濯夫 (dhobi) の居住区は Shāhjahānābād には多数あって, ガーリーブが言及しているのがどこを指しているかは不明である。しかし, Delhi: Plan of the City においては, Muḥalla Panjābī の近くにあるものだけが Kaṭra Dhobi Wāra と記載され, 他は全て Kaṭra Dhobi とだけある。書簡での併記の仕方からして, おそらく, Shāhjahānābād 北西部の地区を指しているものと思われる。ミール・ハイラーティー邸 (Haveli Mir Khairāti) は, 南部 Turkman Darwāza そばに位置していた。

GK: 516 で, Bholo Shāh の墓所 (qabr) の前に上等な天幕が張られたとあるが, これはカーブリー門の外側すぐにある。

ガーリーブはこの書簡を最も親しい弟子の一人で, 大反乱時にデリーを出て Panipat に移住した Mir Mehdī Majrūḥ (1833?-1903) 宛てに出していることから, この書簡に出てくる地名や建造物名は, 当時の彼らの間ではよく知られたものだったと推定される。ガーリーブと同時代のムスリム思想家 Sar Saiyid Aḥmad Khān によるデリーの遺跡に関する著作では, ガーリーブの書簡に見られる建造物に関して, Khān (III): 273 で Lāl Ḍiggi の絵が掲載されているだけであり, 現時点では, 書簡に見られる地名等のこれ以上の特定はできなかった。

Dehli: Plan of the City と The Fort & Cantonment of Dehli は, 大反乱時のデリーを記した地図であるが, これによれば, The Fort & Cantonment of Dehli にある Gazattee Press, Magistrates House, Post Office が, Dehli: Plan of the City では, 印刷所 (Chāpa Khāna), 屋敷緑地 (Bāgh Koṭhi あるいは Koṭhi Sikandar Ṣāḥib が相当するものと思われる<sup>84)</sup>), 郵便局 (Dak Ghar) に相当するものと思われる。郵便局に関しては, Gazetteer of the Delhi District 1883-84: 205-206 において, 郵便局が Magazine として知られる建物 (a building) を占有した, と書いている。Hairat 1903: 356 に郵便局 (Sarkāri Dāk Khāna) に関する記述があり, 「[郵便局では] 大反乱の間も, 数名の職員が大変な勇気を以って最期 [に殺害される] まで仕事を続け, 現在では, 彼らの記念碑がここに作られている。郵便局のそばには古い Magazine の入口があるが, 東インド会社職員 (mulāzmin-e sarkāri) は勇敢に, これ [magazine] を反乱軍から守り通した。結局 magazine

84) Eckart Ehlers & Thomas Krafft 1993 には, Koṭhi Resident Ṣāḥib という記述が見られる。

は撤去された」と記されている。デリーの安定後、magazineの跡地に郵便局が移転したものと考えられる。

なお、The Fort & Cantonment of Dehliに見られるMagazineのあたりには、Dehli: Plan of the CityではMaḥal Sarā'ī, Ṣāḥiba Maḥal, takiya, ḥammām等の記載が見られ、また前者でのMagistrates Houseのあたりには、後者ではShish Maḥalと書かれてある。さらに、Dehli: Plan of the Cityでは、ガーリーブのいうMuḥalla PanjābiやKaṭra Dhobi Wāra 境界が入り組んだ袋小路になっているのに対し、The Fort & Cantonment of DehliやChenoy 1998: 50; 156では、この境界が緑地帯になっている<sup>85)</sup>。このような特徴から、ガーリーブの1860年の書簡にある記述は、The Fort & Cantonment of Dehliに描かれた状況に最も近いものと思われる。

#### 4 Shāhjahānābādの市民生活

大反乱時、暴行や殺人、略奪以外に市民を悩ませたのは水不足である。GK: 500-501; 524などにあるように、反乱軍が井戸を瓦礫で埋めたために、Shāhjahānābādにおける水不足が深刻になったことをガーリーブは幾度も言及している。GK: 524には、デリー城の外に設営されていたLal Diggī池の水が塩辛くなったと書いているが、Shāhjahānābād住人は、この水を飲むしか術はなかった。Ikrām: 153には、当時の状況を以下のように記している。「大反乱が発生すると食糧や水を得ることが困難となった。幸運なことにデリーに反乱軍が入って3日後にパティアーラのマハーラージャがḤakīm Maḥmūd Khān一族の屋敷を保護するために兵士(sipāhi)を送った。治安が安定すると、住人は兵士に対し水を求めたため、バーザールまで出掛ける許可が与えられた。だが甘い水の出る井戸は遠くにあり、そこに行くのは即ち死を意味していた。そこで人々は近場の井戸から塩辛い水を汲んで渴きを凌いでいた。辛い日が続いてしたが、ある日雨が降り、人々は甕を置いて水を貯めた。」

1860年の書簡[GK: 989]では、飢饉の他にコレラや熱病の発生を述べられる一方、1862年の雨季には大雨のため家屋が崩落し、多くの犠牲者が出たことが書簡に描かれている[GK: 659]。また前年は叛乱で食糧不足となったが、翌年は洪水のため食糧難となった。

1858年6月頃の書簡[GK: 281]では、大反乱によって命を落としたイギリス人への追悼を述べているが、1860年[GK: 989]では、ガーリーブの知人を含む多数のインド人がイギリスによって処刑されたり、財産を没収されたことを嘆いている。

#### 5 郵便事情

黒崎2002によると、東インド会社のClive卿は1766年に政府郵便制度を設立する条例

85) Noe 1986: 246には、イギリスによって取り壊された地域が地図上で紹介されており、この地域とガーリーブが前述の書簡で紹介している、「跡形もない」建造物のあった地域はほぼ一致している。

order を出し、1774 年には一般人の利用も可能となった。1837 年に郵便法 (Post Office Act of 1837, or Act XVII of 1837) が制定されると、それまで流通していた民間の飛脚制度は、認可 license を受けていない場合、東インド会社領内での営業を禁じられた<sup>86)</sup>。

ガーリーブの現存する書簡は 1847 年のものが最も古いですが、この時既にイギリス式の郵便制度は整っていた。1854 年 10 月 1 日にインドで全国均一料金が確立され、郵便法 (Act XVII of 1854) によって、東インド会社領内を 4 つの郵便圏 (Postal Circles) に分け、その共通郵便料金として半アンナが最低基本料金に設定されると、その料金の安さ故に、飛脚はほぼ消滅したという。4 つの郵便圏とは、Bengal (Assam, Burma, Singapore を含む)、North-West Provinces, Barmby (Sindc (Sindh), Hyderabad Deccan, Middle East を含む) で、デリーはこのうち North-West Provinces Circle 内の Sudder (Sadr) Post Offices の一つだった [黒崎 2002]<sup>87)</sup>。

ガーリーブの住居はデリー市内、チャンドニー・チョウクのニール横丁 (Kaṭra Nil) の反対側にある Ballimārān 街区にあった。Dayal: 80 によると、この地区は Shāhjahānābād の中でも規模が大きく、ḥakīm や maṅṣabdār, nawwāb, 宗教指導者 (spiritual guides), そしてガーリーブが住んでいたことで知られていた<sup>88)</sup>。ガーリーブがしばしば言及した Kāle Ṣāhib という、ザファル 2 世皇帝の pīr だったスーフィーもこの地区に住んでいた。Sudder Post Office 管轄下には多くの Town Branch が設けられて、郵便物は郵便局に持ち込むことが基本となっていた。ガーリーブが小間使いのカリヤーン (Kaliyān) に書簡を持たせて走らせた [GK: 273 など] のはこのためである。カリヤーンの足が腫れたため投函できなかったともある。配達に関しては、1858 年 4 月 25 日付の書簡のように、カリヤーンが郵便物を投函して戻った直後に配達夫が来たというくだりがあり、配達と集荷は別業務であったと思われる。

書簡において、しばしば言及されている be-rang<sup>89)</sup> という郵送方法が用いられたのには、

86) その後も飛脚は残っていたという。GK: 566 の郵便局員は「官の sarkāri」という語がついていることから、民間の飛脚がいたであろうと推測できる。当時の料金は距離に応じて 2 アンナから 5 ルピーに設定された。1840 年にイギリス本国で郵便切手の発行が始まり、1852 年にはカラーチーでもアジア最初の切手が半アンナで出された [黒崎 2002]。

87) 本文中に引用した 1858 年 12 月 27 日付の書簡においてガーリーブは、手紙をよこすよう催促する中で、「半アンナをけちるな」と書いている。

88) Dayal 1975: 80 によると、ballī は「權」を、mārān は、mārānā「漕ぐ」の派生語で、ジャムナ川の船漕ぎ達が住んでいたという。Dayal 1975: 66 にはガーリーブの住居の写真が掲載されている。Ballimārān の表記については、GK では Ballimarūn とあるが、“mārān”と発音していたようである。

89) Be-rang という用語は、現在の北インド、パキスタンでも一般的に用いられている。Rahbar: 154 の指摘通り、ガーリーブはペルシア語の be-rang という語を書簡で用いていたと考えられるが、その綴りは be+ye+re+nun+gāf で ye と re の間が離れていないため、bering とも発音できる。その場合、ガーリーブが “bearing” という英語そのものを用いていたことになるが、この点是不明である。

切手を貼らずに書簡を出した場合、未納料金を徴収するために配達夫が必ず宛先まで届けるという事情があった。be-rangの手紙についてガーリブが相手に「喜びたまえ」と書いたのは、宛先に支払わせることからの冗談であろう。1853年3月28日付及び1858年9月30日付の書簡にある通り、post paidの書簡が届かなかったことがあり、ガーリブはpost paid便に対して不信感を抱いていたようである[GK: 252-253; 297]。

当時の郵便制度では、消印のフォーマットが統一されていて、公用郵便や軍事郵便の場合はFreeという表記と受付郵便局名の入った赤い消印が押され、一般の前納郵便の場合はPaidという表記と受付郵便局名の入った赤い消印が押された。これに対し、受取人払いの場合は、いくら後納するかを示すBearingという表記と受付郵便局名の入った黒い消印が押してあった[黒崎 2002]。1858年6月19日付の書簡において、ガーリブの許に届いたbe-rangの小包に、黒い消印があったと記されており、ガーリブは配達夫の言う通り郵便料金を支払っている。Rahbar: 154は、Bearingの意味を、“Not Bearing Postage Stamps”からの派生語だとし、stamplessの手紙は、be-rang(色なし)であるから、bearingの語が転化して用いられるようになったと推測しているが、この場合は、他の消印が赤だったのに対し、後納がbe-rangの黒だったことから、bearingとbe-rangを掛けたものと考えの方が妥当であろう。また、ガーリブ自身は、前納よりも受取人払いの方が確実に宛先に届くものと信じており、周辺にこれを勧めていたことがわかる。なお、この書簡にあるように、郵便局には手紙投函用の箱baksと小包用が別にあった。

大反乱期のガーリブはほとんど外出しなかったと自身が述べている通り、彼は自宅に籠ってペルシア語の日記*Dastanbū*を書いていた。当時のデリーにおける郵便事情に関しては、Majmudarによると、郵便に支障がきたされたのは反乱軍がデリーに入った1857年5月10日から、イギリスがデリーを制圧する9月20日までの約4ヶ月間のことで、それ以降はmail coachによって、デリー市内のcantonmentにも不自由なく郵便物が届けられたという。大反乱後に出されたガーリブの書簡で現存する最も古いものは1857年12月5日付のTafta宛のものである。1858年4月25日付のTafta宛の書簡では、手紙は一両日中に、パケットpakīṭは4、5日以内に届くと書いており、その後30日には、同じTaftaに、前の郵便物がもう届いたであろうとの内容で手紙を書き始めているあたりは、ガーリブの郵便制度に対する信頼も窺える。

大反乱前後の彼の住居はデリー市内のBallimārānという街区内にあり、1860年6月に立ち退きを命じられた後も同一街区内に住んだ。ただ、書簡の宛先については、「デリーのガーリブ」で十分だとしながらも[GK: 310; 369]、ラール池など、配達夫が間違いかねない住所は書かないよう勧めていた。当時のデリーで、手紙を書くインド人がかなり限られていたであろうことは想像に難しくなく、宛先に住所を厳密に記入する必要がなかったことは考えられるが、むしろガーリブの本心としては、デリーで自分の名が知られているということを友人達に知らせたかったのだろう。配達夫や郵便局長などと知己を得ているとか、デリー

市内で自分宛の手紙や荷物が紛失したためしはないなど [GK: 297], デリーの配達夫で自分を知らぬ者はいない, ということを自慢する箇所は多数見られるのである。

ガーリブが手紙を書くことに熱中していたことは, 1858年6月19日付の書簡をはじめ, 多くの書簡で返事を催促するところからも窺える [GK: 276; 1052; 307; 312]。自分の出した手紙の返事を10日間待つところからも, ガーリブは自分の様子を他人に知らせるのみならず, 1858年12月27日付の書簡で, 「孤独の中, ただ書簡を頼りに生きている」 [GK: 307] と書いたように, 知人からの手紙を受け取ることで, 知人のいなくなったデリーでの暮らしの淋しさを紛らわせていたのだった。なかなか手紙を書かない Tafta に対し, 手紙を書くよう催促していたが, 1859年1月3日付の書簡のように, 皮肉や戒めを交えたこともよくあった [GK: 308]。

同じ書簡に, 毎日数通が届き, その返事を書いていたことや, 1日に数回配達夫が書簡を届けにやってきたことを記していることから [GK: 307], ガーリブは頻繁に手紙を書き, その書簡の総数は, 現存するものをはるかに上回る, 相当数にのぼったものと思われる。なお, ガーリブは配達夫として *harkāra* と *qāšid* の2語を用いているが, Bayly 1996: 60 によると, *qāšid* は普通, 長距離郵便を担当するという。

また, ガーリブの晩年も近い1866年1月23日付の書簡 [GK: 566] によると, 150冊の本を詰めた荷物を発送しようとして郵便局に断られたと記している。荷物の大きさ, 重さ等に関しては, 何らかの制限があったものと思われる。興味深いのは, 郵便局に受付を拒否されたガーリブは, *ṭheke wāle, pamfleṭ pākiṭ wāle, rel wāle* にも発送を頼み, 断られていることである。すなわち, 郵便局以外に, 何らかの郵送請負業者がいたという可能性が高い。また, 1867年1月3日付の書簡 [GK: 569] のように, この時期, スーラトやボンベイなどへの郵便配達には鉄道が利用されていた。また朝8時に手紙を書きながら, まだ郵便配達に来ない, と書いているが, これは手紙を待ち侘びる表現なのか, それとも配達時間が早朝にも設定されていたのかは不明である。この書簡の場合, ガーリブは手紙を *be-rang* で送り, 小包は *peḍ (paid)* で発送している。

なお, GK: 680-681 に, ガーリブの使用人が靴を発送するのに, 受け取りを貰うまで待ち続けて夜9時になったというくだりがある。ガーリブは受け取りを得るまで, 使用人や郵便局員を信頼していなかったのであろうか。また, 郵便局が当時夜間9時頃まで開いていたのかどうかは不明である。

## 6 宮殿との関係, 大反乱後の捜査

ガーリブ自身は, 大反乱以前の1850年に王朝史を編纂することになってデリー城に出入りするようになり, 1854年にはザファル帝の詩作の *ustād* となっていた。念願の宮殿入りを果たしたものの, 王朝史編纂については, *Ā'in-i Akbari* 等過去の文献を書写するだけの単純な作業であると述べて [GK: 1115-1116], ほとんど熱意を見せておらず, 1851年9

月 9 日の時点で Humayūn の項目を終えたとしておきながら [GK: 1105], 1853 年 4 月 10 日の書簡でも Humayūn の項目だと書き [GK: 1123], 進捗していない様子が窺える。

歴史編纂や皇帝の詩の添削のために宮城に出入りしていたガーリブは、城内での詩会 (musha'ira) の開催 [GK: 1124] や、皇帝の病状 [GK: 1132] など、宮殿内の出来事を詳しく書いていた。

しかし大反乱後、イギリスが間諜 (mukhbir) を使って反乱軍に荷担した人物の特定を行ない、間諜による通告で多くの人物が marshal law court に突き出された [Ikrām: 155] ため、宮殿に出入りしていたガーリブは自身にも何か起こるのではないかと不安感を持った。ガーリブの書簡からも、イギリス政府が、反乱に関与した人物の逮捕に躍起になっていたことがよくわかる。ガーリブも多くの知人を失った [GK: 989]。ガーリブは、反乱に関しては自分が無関係で、反乱罪については無実を確信していると幾度も述べている [GK: 267-269; 272; 674-675]。

ガーリブは、間諜の誤った報告によって、ザファル帝の貨幣に詩句を書いた疑いをかけられたが、それが事実無根であったことが判明し [GK: 674-675], 捜査対象からは外れることとなった。

捜査対象から外れたものの、ガーリブは約 3 年間年金を支給されず、将来についての不安を繰り返し述べている。年金確保後の大変な喜びよう [GK: 322] から、反乱後のガーリブの生活に対する不安感が伺えるのである。

## おわりに

以上、ガーリブの書簡に見られるインド大反乱当時のデリーの状況をいくつかの側面から検証してみた。ガーリブの書簡は、私信ではあるが、当時のデリーの社会状況を知る上で貴重な史料である。特に、デリーの建築物に関しては、*Khān* 1847 に記載されているモスクや聖者廟など有名な公共施設ではなく、個人の邸宅等に関する記述が豊富であり、その点で他の史料にはない情報を提供してくれる。惜しむらくは、ガーリブ書簡に当時の事物や事件が豊富に含まれているにもかかわらず、これまでの版で十分な校訂がなされなかったため、地名や人名などに不明な点が多いことである。史料的価値を鑑みても、今後詳細な校訂版の出版が待たれるところである。

ガーリブの書簡がウルドゥー近代散文の嚆矢と評価される最大の理由に、口語的な文体、表現と、そのリアリティに富んだ内容が挙げられるだろう。それまでのウルドゥー散文作品は、宗教書や聖者伝であったり、寓話的物語文学作品が主流であった。そこには空想や伝説の世界が横たわっていたのである。ガーリブがその書簡において、実生活を、自分の見たまま、感じたままに素直に書き記しているという点は、ウルドゥー文学において「自分を率直に語る」という、新風を起こしたのであった。デリーの変貌や、年金や借金の問題、自らの

晩年の衰弱を記した様は、悲哀に満ちながらも、リアリティの面白さを読者に十分伝えてくれるのである。

ガーリブが、最期まで自分の書簡の価値をどこに見出していたのかはわからない。彼自身が書簡で記しているように、ひょっとすると、書簡の文体や洒落が好まれたとだけ思っていたのかもしれない。「表現」の項目で紹介した書簡の文章の中には、現在書簡の結句として用いられるほど有名になった GK: 533; 420 などもある。しかし、彼の書簡の真の価値は、そのリアリティであり、これがウルドゥー近代散文史における重要な転換点となっただけでなく、歴史史料としての価値をも持たせることとなった。

ガーリブは書簡を見知らぬ人間に書いたのではなかった。見知らぬ人間に一度きりの手紙を書くならば、嘘や誇大な表現も可能だったろう。イギリス人に阿るために大仰な詩句を献上するようなことは、詩人にとっては造作のないことなのである。しかしガーリブは、デリー時代の友人やパトロンなど、同じ人物に対し自分の様子を私信として繰り返し書きしたためていた。もし嘘や大袈裟な表現を書き続けていれば、周囲はその書簡を読む気にもならなかっただろう。ガーリブはデリーの建物や地名、当時の食生活や物価を知る旧友、親友に対して、ありのままを書いていたのだ。ガーリブ自身が、書簡と文学上の散文作品を別物と認識していたことも、ありのままを書く上で影響していたかもしれない。書簡が公的なものであれば、その体裁、内容はまた別の史料的意味を持つであろうが、彼の書簡は私信であり、この「私」の部分が、リアリティ豊かな読み物としての魅力を持ったことになる。年金取得目的でイギリス政府に献上したペルシア語の日記 *Dastanbū* には殺害されるイギリス人の姿が描かれているが、ウルドゥー語の私信にはそのような記述がほとんど出てこないことも、*Dastanbū* が建て前の日記であるのに対し、ウルドゥー語の書簡が本心を吐露したものであることを裏付けるのである。

感嘆すべきは、19世紀中期のインドにおいて、書簡をそのまま出版させた人物が存在したということである。もしこの書簡を保存しようという者が現れなければ、これほどの書簡が残されたとは思えない。書簡を出版した人たちは、私小説の概念を知る由もなく、素直にガーリブの書簡の文体やリアリズムに惹かれていたのであろう。ガーリブの書簡はその後ウルドゥー散文の手本となり、ウルドゥー文学では多くの作家たちの書簡集が出版されていくこととなる。

ガーリブの書簡には、デリーの一時代を象徴する建物が取り壊される様が綴られている。それは都市の一時代の終焉を示し、同時に新しい時代の幕開けを意味している。同様に、ガーリブはウルドゥー文学史上、最後の古典詩人と称されるが、詩作において古典的な色彩を残しながら、散文では、新たな時代へ踏み出しつつあったのだった。

ガーリブの書簡は、その文面から察するに、現在確認されている数の数倍はあったものと思われる。同時に、彼宛の書簡も相当数あったと史料される。もしこのような書簡がさらに発見されれば、当時のデリーの社会状況がよりはっきりと浮かび上がることだろう。また、

同様のウルドゥー散文作品の研究も、今後の課題となろう。

[追記] 本稿は平成 13 年度文部科学省科学研究費補助金(奨励研究(A))「ラーホールでのウルドゥー文学空間の研究：現代南アジアにおける「知」の動態的研究」研究代表者：山根聡：課題番号 13710300) による成果の一部です。本稿執筆にあたり、Dr. Tabassum Kāshmirī 大阪外国語大学客員教授、黒崎 卓氏、山根 周氏、大石高志氏より貴重な資料提供、助言をいただきました。ここにご芳名を記して謝意を申し上げます。

## 参考文献

- AG I : Lāl, Munshī Jīvan Lāl, *Akhbār-i Ayyām-i Ghadar Hīṣṣa-yi Avval (from 11–31 May 1857)* (OIOC/or. 11170).
- AG II : Lāl, Munshī Jīvan Lāl, *Akhbār-i Ayyām-i Ghadar Hīṣṣa-yi Duvvum (from 5 June–14 Sept. 1857)* (OIOC/or. 11170).
- AG III : Lāl, Munshī Jīvan Lāl, *Akhbār-i Ayyām-i Ghadar 1857 dar Dihlī min Ibtidā-yi 11 Māh Ma'ī 1857 laghāyat 23 Māh-i Mazkūr, (Munshī Jīvan Lāl's Original roz-nāmah)* (OIOC/or. 11170).
- DI : Buckland. C. E. (1905?) *Dictionary of Indian Biography*. (1985, rep. ed) Lahore.
- DG : *Divān-e Ghālīb : Nuskhā-e 'Arshī*. ('Arshī, Imtiyāz 'Alī Khān ed.) (1958) Lahore (1992 rep ed).
- GD : *Gazetteer of the Delhi District 1883–84*. (1885?) Lahore (rep. ed. 2000).
- GK : Anjum, Khaliq(ed) (1984) *Ghālīb ke Khuṭuṭ I*. Delhi.
- GK : Anjum, Khaliq(ed) (1985) *Ghālīb ke Khuṭuṭ II*. Delhi.
- GK : Anjum, Khaliq(ed) (1987) *Ghālīb ke Khuṭuṭ III*. Delhi.
- GK : Anjum, Khaliq(ed) (1993) *Ghālīb ke Khuṭuṭ IV*. Delhi.
- IG : *The Imperial Gazetteer of India Vol. IV Administrative* (1909, New Edition).
- IU : Warith Sirhindī (1977) *Ilmī Ūrdū Lughat*. Lahore.
- MN : Saiyid 'Abd al-Rashīd Fāzil(ed) (1854–55 (1271 H.)) *Mīhr-i Nīm Rūz*. Karachi (1969 rep).
- NG : *Nāma-e Ghālīb* (1865) Delhi. (OIOC/ 14117. 6. 10).
- RG : *Ruq'āt-e Ghālīb* (1914) Amritsar. (OIOC/VT 3923 h).
- UHa : *'Ud-e Hindī*. (1868) Meerut. (OIOC/ 14117. 6. 10).
- UHB : *'Ud-e Hindī*. (1869) Meerut. (OIOC/ 14117. 6. 15).
- Dehli : Plan of the City 1850 : A Native Map with Names in the Vernacular Character (IOR/ X/ 1659).
- Dehli 1857 (IOR/X/ 1663).

- The Fort & Cantonment of Dehli (IOR/X/ 1661).
- Trigonometrical Survey of the Environs of Delhy or Shah Jehanabad 1808 (IOR/X/ 1658).
- ‘Abd Allāh, Saiyid (1965) *Mubāḥith*. Lahore.
- Aḥmad, Bashīr al-Dīn (1919) *Waqi‘āt-e Dār al-Ḥukūmat-e Dihlī II*. Delhi (1990 rep ed).
- Aḥmad, Khaliq (1989) *Dillī: Tārīkh ke Ā‘īne men*. Delhi.
- Āzād, Maulānā Muḥammad Ḥusain (Tabassum Kāshmirī ed.) (1880) *Āb-e Ḥayāt*. Lahore. (1990 rep. ed).
- Bayly, C. A. *Empire and Information: Intelligence Gathering and Social Communication in India, 1780–1870*. Cambridge.
- Beg, Mirzā Farhat Allāh (1960) *Dihlī kā Ek Yādgār Mushā‘ira*. Karachi.
- ベルニエ (1993) 『ムガル帝国誌』 岩波書店
- Chenoy, Sharma Mitra (1998) *Shahjahanabad: A City of Delhi 1638–1857*. Delhi.
- Dā‘udī, Khalīl al-Raḥmān (1967) *Majmū‘a-e Nathr-e Ghālīb Urdū*. Lahore.
- Dayal, Maheshwar (1975) *Rediscovering Delhi: The Story of Shahjahanabad*. Delhi.
- Dihlavi, Saiyid Aḥmad (1918) *Farhang-e Āṣafīya I*. Lahore (1987 rep ed).
- Gupta, Narayani (1981) *Delhi Between Two Empires 1803–1931: Society, Government and Urban Growth*. Delhi.
- Gupta, Narayani (1993) The Indomitable City. In: Eckart Ehlers and Thomas Krafft(eds). *Shahjahanabad /Old Delhi: Tradition and Colonial Change*. Stuttgart.
- Ḥairat, Mirzā, Dihlavi (1903) *Cirāgh-e Dihlī*. Dehli. (1987 rep. Ed)
- Ḥālī, Maulānā Alṭāf Ḥusian (1897) *Yādgār-e Ghālīb*. Kanpur.
- Ikrām, Shaikh Muḥammad (1957?) *Ḥayāt-e Ghālīb*. Lahore. (1982 rep ed)
- Jain, A. K. (1994) *The City of Delhi*. Delhi.
- Jalal, Ayesha (2001) *Self and Sovereignty: Individual and Community in South Asian Islam Since 1850*. Lahore.
- Kaukab, Tafazzul Ḥusain Khān Dihlavi (1863) *Fughān-e Dihlī*. Lahore (1954, rep ed).
- Khān, Sar Saiyid Aḥmad (1847) *Āthār al-Ṣanādīd*. I–III. Dehli. (1990, rep. ed).
- 近藤 治 (1977) 『インドの歴史』 講談社現代新書.
- 近藤 治 (1999) 間野英二著『パーブル・ナーマの研究』Ⅲ訳注 『史林』82 (6), 150–157.
- 久保一之 (2001) いわゆるティムール朝ルネサンス期のペルシア語文化圏における都市と韻文学  
—— 15世紀末ヘラートのシャフル・アーシューブを中心に —— 『西南アジア研究』 54, 54–83.
- 黒崎 卓 (2002) 南アジア近代郵便の成立 『南アジア郵趣談義』.
- <http://village.infoweb.ne.jp/~mariamama/tak-p10.htm>
- Maḥmud, Sayyid Fayyāz(ed), (1969) *Ghalib: A Critical Introduction*. Lahore.
- Majmudar, Mohini Lal, *The Imperial Post Offices of British India (1774–1914) II*.

- 真下裕之 十八世紀半ばのデリー：あるデカン・ムスリムの見聞記から『あうろーら』13, 137-144.
- Mihr, Ghulām Rasūl (1957?) *Khuṭūṭ-e Ghālib I*. Lahore (1969 rep ed).
- Mihr, Ghulām Rasūl (1957?) *Khuṭūṭ-e Ghālib II*. Lahore (1969 rep ed).
- Na'im Ahmad, (1968) *Shahr Ashob*. Delhi.
- Nizāmī, Khwāja Ḥasan (1919) *Ghadar Dihli: Adventures of Mutiny 1857 Part I*. Delhi. (4<sup>th</sup> ed).
- Nizāmī, Khwāja Ḥasan (1920-a) *Ghadar Dihli ke Akhbār*. Delhi.
- Nizāmī, Khwāja Ḥasan (1920-b) *Ghadar Dihli ke Giriftār Shuda Khuṭūṭ*. Delhi.
- Nizāmī, Khwāja Ḥasan(ed) (1921) *Ghālib kā Roznāmca-i Ghadar*. Delhi.
- Noe, Samuel V. (1986) What Happened to Mughal Delhi: A Morphological Survey. In: Frykenberg, R. E. (ed), *Delhi Through the Ages: Essays in Urban History, Culture and Society*. Delhi, 237-249.
- Prigarina Natalia (2000) *Mirza Ghalib: A Creative Biography*. Karachi.
- Qureshi, Salim (1999) *Ghadāron ke Khuṭūṭ*. Lahore.
- Rahbar, Dā'ūd (1987) *Urdu Letters of Mirza Asadu'llah Khan Ghalib*. New York.
- Rām, Mālik (1977) *Fasāna-e Ghālib*. Lahore.
- Rizā, Kāli Dās Guptā (1990) *Ghālib ki Ba'z Taṣānif ke Bāre meṅ*. Bombay.
- Sadiq, Muhammad (1964) *A History of Urdu Literature*. Karachi. (1985 second ed.)
- Ṣiddiqī, 'Atiq(ed) (1966) *Atṭhāra Sau Sattāwan: Akhbār aur Dastāvezeṅ*. Delhi.
- Yamane, So (2000) Lamentation Dedicated to the Declining Capital: Urdu Poetry on Delhi during the Late Mughal Period. 『南アジア研究』12, 50-72.
- 山根 聡 (2000) デリーへの哀悼詩 『世界文学』5, 279-358.
- 山根 聡 (2001a) マウドゥーディーのイスラーム復興運動：20 世紀インド・ムスリム知識人の動態的研究 『アジア太平洋論叢』11, 167-210.
- 山根 聡 (2001b) 帝国の栄華と滅亡を詠った詩 『インドの文学Ⅱ』週刊朝日百科, 朝日新聞社, 168-169.

(大阪外国語大学外国語学部)